

聖書ヘブライ語のラテン文字転写について

— 文字学・文字論的考察と筑波方式の提案 —*

池田潤（筑波大学）・高橋洋成・池田晶（筑波大学大学院）

キーワード：聖書ヘブライ語、ラテン文字転写、翻字、音訳、子音表記

1 はじめに

現存するヘブライ語聖書の写本は基本的にヘブライ語式子音型（原シナイーフェニキアー）アラム系文字（以下、ヘブライ文字とする）で書かれる¹。これを言語データとして用いる場合、ヘブライ文字で引用するのが望ましいが、印刷上の都合やヘブライ文字が読めない読者への配慮からラテン文字への転写が必要となる場合もある。ところが、聖書ヘブライ語のラテン文字転写には驚くほど多くの方式がある。同一の記号が異なる意図で用いられることさえあり、混乱や誤解の原因になりかねない。これを端的に例示するのが、表 1（p.62）である。

これは G. A. Rendsburg、D. T. Tsumura、Sh. Izre'el、J. Ikeda という 4 名の研究者がある学会誌の同じ巻で用いた転写方式を比較した表である。パタハ、カメツ、セゴル、ツェレ、シュワはいずれもヘブライ文字に付される母音記号（詳しくは、後述）の呼び名である。パタハは 4 人とも a と

*本稿は、平成 15 年度に筑波大学人文社会科学研究科で開講された「一般言語学演習」における議論に端を発し、その後 3 人の分担執筆者（以下、単に「筆者」とする）が引き続き重ねた検討の産物である。その過程において文部科学省の科研費（13410141）「古代オリエントの楔形文字言語間の言語接触の研究」（研究代表者：大城光正）の助成を得た。なお、本稿で聖書箇所を引用する際には、新共同訳聖書の略号を用いる。

¹したがって、これらをもとに作成される聖書テキストの校訂版（*Biblia Hebraica Stuttgartensia* など）も同じ文字で書かれる。ただし、死海写本では一部の文字がヘブライ語式子音型（原シナイー）フェニキア系文字で書かれる。式・型・系による文字の分類方法および文字の類型に関しては、福盛・池田（2002）を参照。

| | Rendsburg | Tsumura | Izre'el | Ikeda |
|------------------|----------------|-------------|--|---|
| バタハ / カメツ | a / ā~o | | a / â | |
| セゴル / ツエレ | e / ē | | æ / e | |
| シュワ・ナア / シュワ・ナハ | ě / - | ə / - | - / - | |
| 複合シュワ | ǎ, ě, ǒ | | ^a , ^æ , ^á | |
| matres lectionis | v ^h | î, ô, û, vh | - | i ^y , o ^w , u ^w , v ^h |
| 弱ダゲシュ | 表記しない | | b, g, d, k, p, t で表記 | |
| コフ | q | | ḳ | |

表 1: さまざまな転写方式²

転写するので問題ない。しかし、カメツは、Rendsburg と Tsumura が環境によって相補的に ā ないし o と書き分けるのに対し、Izre'el と Ikeda は常に â [a] と転写する。セゴルとツエレの転写にはより深刻な問題がある。Rendsburg と Tsumura はこれらを長さの異なる母音と捉えてそれぞれ e, ē と転写するが、Izre'el と Ikeda はこれらを開口度の異なる母音と解釈してそれぞれ æ, e と転写する。方式によって e がセゴルを表したり、ツエレを表したりする点が混乱を招きやすい。シュワ³については、一貫してゼロ (-) で表記する（つまり、表記しない）立場（Izre'el と Ikeda）と環境によって相補的にあいまい母音（ě ないし ə）と無音（表記しない）を区別する立場（Rendsburg と Tsumura）とがある。matres lectionis とは母音を間接的に示す子音字（詳しくは、後述）のことである。Tsumura はそのうちウないしヨッドが添え書きされた母音を一貫して î, ô, û と転写し、Ikeda は添え書きされた子音をすべて肩に上げて示す。Rendsburg と Izre'el はともに転写上これらを（Izre'el はへーも）無視するが、Rendsburg は（matres lectionis とは無関係に）母音の長さを共時的・通時的に判断して長短を書き分ける点で Izre'el と一線を画する⁴。

²Ikeda (2003:3) の表をもとに、用語等を一部日本語やカタカナに置き換えた。

³表 1 には「シュワ・ナア / シュワ・ナハ」とあるが、文字上は同一の記号である。同一の記号が発音上あいまい母音として実現される場合（シュワ・ナア）と無音として実現される場合（シュワ・ナハ）があったという仮説に基づき、ヘブライ語学では広く「シュワ・ナア」（有音のシュワ）と「シュワ・ナハ」（無音のシュワ）という区別を立てる。

⁴Rendsburg は長母音に ˘ を付けるが、語源的に長い母音は特に ˘ で示す。Tsumura も同

表1にあげたのは既存の転写方式の一部であり、これ以外にも数多くの方式が存在する。しかし、これらを統一しようとする動きはない⁵。各方式には歴史と伝統があるためか、それを相互に尊重しあっている感が否めない。たしかに、歴史と伝統なしに学問はありえないと言えるが、聖書ヘブライ語の貴重な言語データを閉じた伝統から開放して一般言語学に役立てるためには、より一般性の高い転写方式を模索する必要がある。また、転写は二次的・技術的なものに過ぎないため、数ある方式の間に本質的な優劣はなく、したがってどの方式を用いても大差はないという考え方もあろう。しかし、上の例からも分かるとおり、転写は必然的に文字記号に対する(しばしば仮説的な)解釈を含み、技術的な問題にはとどまらない。ヘブライ文字をラテン文字でどう転写するかはヘブライ文字に対する文字学的理解および聖書ヘブライ語に対する文字論的理解を映し出す鏡である⁶。したがって、文字学・文字論的観点から転写方式間の優劣を問題にすることは可能であると筆者は考える。

そこで本稿では、言語学者一般に分かりやすく、文字学・文字論的にも優れた聖書ヘブライ語の転写方式を模索してみたい。まず聖書ヘブライ語のラテン文字表記をめぐる諸問題(第2節)および既存の主な転写方式(第3節)を概観したうえで、現時点で筆者が最良と考える方式を提案してゆく。これを「筑波方式」と呼ぶことにしよう。第4節で筑波方式の詳細を解説し、第5節で実際のテキストの翻字例を示すことにより、誰でもこの方式が使えるようにしたい。なお、本稿の執筆に際しては池田潤が第1・2・6節、池田晶が第3節、高橋洋成が第4・5節を担当し、池田潤が全体的なとりまとめをおこなった。

じ記号を使うが、˘によって母音記号を区別し、ˆで *matres lectionis* を示す。Izre'el と Ikeda は ˘ と ˆ をいっさい使わない。

⁵現代ヘブライ語も含めて転写方式を統一しようとする試みとして、Weinberg (1970) がある。これは両言語の歴史的一体性を確保したり、現代ヘブライ語で聖書をどう音読するかを定めたりする言語政策上の意義を有する試みではあるが、現代ヘブライ語と聖書ヘブライ語は音声学的にも音韻論的にもかなり異なる言語であるため、両者のラテン文字転写を無理に統一する必要はないと筆者は考える。Jotion (1996:35) の訳者による注7参照。なお、Jotion (1996) は訳者による大幅な改定が加えられているため、聖書学では Joüon-Muraoka として引用される。本稿でも以下、この慣例に従う。

⁶ここでは福盛・池田 (2002:33) に従い、文字学は主に文字の形式・形状を扱う分野、文字論は言語学の一分野として文字の言語的機能(たとえば、ある言語とある文字との対応をふまえた表音・表音素・表形態素・表語機能など)を扱う分野と定義する。

2 聖書ヘブライ語のラテン文字転写をめぐる諸問題

2.1 ヘブライ語聖書テキストの特殊性

ヘブライ文字は次の 22 文字からなる。子音文字の類型に属し、原則として母音を表記しない。

| 文字 | 名称 | 音価 | 文字 | 名称 | 音価 |
|----|------|-----------------|----|--------|----------------|
| א | アレフ | ʔ | ל | ラメッド | l |
| ב | ベート | b~v | מ | メム | m |
| ג | ギメル | g~ɣ | נ | ヌン | n |
| ד | ダレット | d~ð | ס | サメフ | s |
| ה | ヘー | h | ע | アイン | ʕ |
| ו | ワウ | w | פ | ペー | p~f |
| ז | ザイン | z | צ | ツァデー | s ^ʕ |
| כ | ヘット | ħ | ק | コフ | k ^ʕ |
| ט | テット | t ^{ʕ7} | ר | レーシュ | r |
| י | ヨッド | j | ש | スイン、シン | ʃ~ʒ |
| כּ | カフ | k~x | ת | タウ | t~θ |

表 2: 子音文字一覧⁸

ヘブライ語聖書の子音テキストは紀元前 1 千年紀に数百年をかけて成立したが、母音は基本的に暗誦され、口伝えで継承された。しかし、ヘブライ語聖書に母音に関する情報がまったくないわけではない。ワウ、ヨッド、ヘー（後にはアレフも）が *matres lectionis* として利用される場合があ

⁷ 聖書ヘブライ語の強勢音の音声学的実体は不明。ここではアラビア語に準じて咽頭化音ととったが、喉頭化音の可能性もある。

⁸ 音価は比較言語学的に推定したものであり、IPA で示してある。詳しくは、Rendsburg (1997) を参照。

る。紀元前2千年紀の子音文字には *matres lectionis* が見られず⁹、この特質はフェニキア文字に受け継がれたが (Krahmalkov (2001:16-17))、フェニキア文字を受容した他言語は押し並べて早い段階から *matres lectionis* を用いている。ヘブライ語も例外ではなかった。ワウで語源的に長い語中・語末の *u* を、ヨッドで語源的に長い語中・語末の *i* を、ヘーで語源的に長い語末の *a* を示すことが多いが、それ以外の用例もある¹⁰。ヘブライ語の場合、時代が下るにつれ *matres lectionis* の使用頻度が目に見えて上がっていったが、100% に達することはついになかった (Andersen and Forbes (1986:326))。ヘブライ語聖書において、*matres lectionis* は随意的補助記号の域を出なかったのである。

後7~8世紀頃になると、当時のユダヤ文化の中心地で「バアレ・ハマソラ¹¹」(以下、マソラと略称する) と呼ばれる学者によってヘブライ語聖書の子音テキストに書き添える母音記号(ニコード)が考案された。バビロンでバビロニア式母音記号、パレスチナ南部でパレスチナ式母音記号、パレスチナ北部でティベリア式母音記号が成立している¹²。このうち現在に至るまで使われているのはティベリア式のみである。

表3 (p.66) を見れば、ヘブライ語を母語としない当時のユダヤ人が聖書をどう読み上げていたかが推定できる。しかし、それは聖書時代の発音と同一ではない。聖書ヘブライ語の短母音は5母音体系 (*a, e, i, o, u*)

⁹原シナイ文字、ウガリト文字など。後者に対しては、2、3の例外を認める研究者もいる (Blau and Loewenstamm (1970) 参照)。

¹⁰たとえば、*matres lectionis* によって短母音を表示する例もある (Andersen and Forbes (1986:95-100))。

¹¹ヘブライ語で「伝統の所有者」を意味する。マソラ学者は子音テキストを保持し、それを暗誦し、その読み方を口承で伝えていった。

¹²これらは形状だけでなく書き分ける母音の数まで異なる方式であり、口承の過程で聖書の読み方に違いが生じていたことを物語っている。佐々木 (1999:11) によると、各方式は下記の母音を書き分けていたという。

| | | | | | | | |
|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|----------------|
| バビロニア | i | e | ä | â | o | u | |
| パレスチナ | i | e | a | o | u | | |
| チベリア | i | e | æ [ɛ] | a | â [ɔ] | o | u |
| | xirik | cere | segol | patax | kamac | xolam | šuruk kubuc |

チベリアはティベリアのこと。xirik は表3のヒリク、cere はツエレ、segol はセゴル、patax はパタハ、kamac はカメツ、xolam はホレム、šuruk はシュルク、kubuc はクブツに対応する。

| | | | | | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 記号 | . | .. | ∴ | - | τ | . | ∴ | ⱱ |
| 名称 | ヒリク | ツェレ | セゴル | パタハ | カメツ | ホラム | クブツ | シュルク |
| 音価 | /i/ | /e/ | /ɛ/ | /a/ | /ɔ/ | /o/ | | /u/ |

| | | | | |
|----|-----|---------|---------|---------|
| 記号 | : | ∴ | ∴ | τ: |
| 名称 | シュワ | ハタフ・セゴル | ハタフ・パタハ | ハタフ・カメツ |
| 音価 | | 複合シュワ | | |
| | | -/ | | |

表 3: ティベリア式母音記号¹³

だったと考えられるが、ティベリア式の母音記号は7母音体系をなしている。また、聖書時代のヘブライ語においては母音の長さが弁別的であったと考えられるが、ティベリア式母音記号は母音の長短を書き分けない¹⁴。そのため、ティベリア式母音記号に基づいて聖書時代の母音を正確に復元することはできない。

なお、マソラ学者が考案したのは母音記号だけではない。ほかに、シン(𐤑)とスイン(𐤒)を区別する点、ダゲシュ、マピク、メテグ、マケフ、各種の抑揚記号等も考案している。シン(𐤑)はセム祖語の *š [ʃ] および *t [θ] に対応し、スイン(𐤒)はセム祖語の *l に対応する¹⁵。ところが、フェニキア語ではセム祖語の *š、*t、*l がすべて /s/ に融合したため¹⁶、ヘブライ語式子音型フェニキア系文字もヘブライ語式子音型(フェニキア)アラム系文字も š / t と l を書き分けることができない。l は聖書時代末期

¹³ 音価は推定によるものであり、音素表示してある。各音素には長母音を含む異音があるが、/ɔ/ に限り母音の長さが弁別的だったとも考えられる。シュワと複合シュワはそれ以外の母音と長さの違いはないが、音節主音声をもたず、音素としては「ゼロ」である。シュワは前後の環境から [i] [e] [ɛ] [a] [ɔ] [o] [u] ないし無音として実現され、実現される音色を特に指定したい場合に複合シュワが用いられる。詳しくは、Khan (1997) を参照。

¹⁴ たとえば、ティベリア式のツェレとセゴルの間に長短の区別はない。Jöüon and Muraoka (1996:§6) によると、ティベリア式の母音体系を5つの短母音 (a, e, i, o, u) と5つの長母音 (ā, ē, ī, ō, ū) に最初に置き換えたのは、後12世紀のヘブライ語文法学者ヨセフ・キムヒだという。

¹⁵ Steiner (1977:41-47) 参照。

¹⁶ フェニキア語の𐤑の音価は [ʃ] であったと考えられる。詳しくは、Krahmalkov (2001:25-26) 参照。

までに s (サメフ) と融合したが¹⁷、文字上は ש with a dot below で表記されたため、聖書時代の終わりには ש に [ʃ] と [s] という 2 つの読みが発生していた。マソラ学者はこれを受けて、これら 2 つの読みを左右の肩に打つ点によって区別したのである (表 4)

| セム祖語 | フェニキア語 | 聖書 ヘブライ語 | ティベリア式 ヘブライ語 |
|------|--------|-------------|-----------------|
| s | 𐤌 [s] | ש [s] | ש [s] |
| š | ש [ʃ] | ש [ʃ~ʃ] | ש [ʃ] |
| t | | | ש [s] |
| ʃ | | | |

表 4: フェニキア系文字による歯擦音の表記

ダゲシュとは文字の中央に打たれる点で、そのはたらきは強ダゲシュと弱ダゲシュに分類される。前者は子音が重なっていることを示し、後者は [+stop] の素性を標示する。たとえば、ダゲシュなしの ש が [ʃ]、ש が [v] と読まれるのに対し、ダゲシュ付きの ש は [ʃʃ]、ש は閉鎖音として [b] ないし [bb] と読まれる。マピクはダゲシュと同じく文字の中央に打たれる点であるが、これは基本的に語末のへーについて、それが *matres lectionis* ではなく、子音字であることを示す。メテグ (別名ガヤ) とは母音記号の左側に添えられた短い縦棒である。メテグの付けられた母音はゆっくり読まれたようだが、第二強勢をもつとも言われる¹⁸。抑揚記号はアクセント、イントネーション、休止等の超分節的な要素を表示する。

以上をまとめると、ヘブライ語聖書は前 1 千年紀に書きとめられた子音と後 7 世紀以降まで口承された母音とを組み合わせた極めて特殊な言語データということになる。同一写本上に書かれた子音と母音の間には千年以上の時間差がある¹⁹。ティベリア式母音記号から聖書時代の母音が復元

¹⁷そのため、聖書ヘブライ語においては š と s が入れ替わるスペリングの例が少なくない。Rendsburg (1997:73) 参照。

¹⁸詳しくは、Yeivin (1980:240-264) を参照。

¹⁹ティベリア式の母音記号は子音文字の上下に書かれ、子音文字と接することはない。こ

できない以上、この時間差は容易には埋められない。比較言語学的見地から聖書時代の母音を復元する試みは常に可能であるが、それは学問的構築物であって聖書テキストの転写ではない。聖書ヘブライ語をラテン文字で書いたり読んだりする場合には、我々はこの点を心に留めるべきである。

2.2 2種類の転写方式の必要性

一般に転写にはもとの文字列が正確に復元できるものと、できないものがある。日本語をラテン文字で転写した場合を例に考えてみよう。たとえば、本稿の題目をヘボン式のラテン文字で転写すると次のようになるだろう。

(1) seishoheburaignoratenmojitenshanitsuite

この文字列から意味は十分伝わるが、もとの文字列を正確に復元することはできない。どの部分がひらがな、カタカナ、そして漢字で書かれていたのか確定できないからである。しかし、仮に漢字を大文字で転写し、カタカナを斜体字で転写すると決めれば、状況はだいぶ改善する。

(2) SEISHOheburaiGOnoratenMOJITENSHAnitsuite

ただし、日本文字を知らない人にはどこからどこまでが一文字なのか判然としない。この点は、文字と文字の切れ目に境界記号を入れることによって解決できる。ここではハイフンを入れてみる。

(3) SEI-SHO-he-bu-ra-i-GO-no-ra-te-n-MO-JI-TEN-SHA-ni-tsu-i-te

ここで問題になるのが漢字である。SEI や SHO には同音異字が数多くあるので、SEI-SHO を見ただけではどの漢字が使われているか確定できない。この問題を解決するには、同音異字にあらかじめ通し番号を振っておけばよい。仮に聖に SEI₁₃、書に SHO₁₀、語に GO₁₄、文に MO(N)₄、字に JI₆、転に TEN₁₁、写に SHA₅ というような番号がついていれば、次のような転写から誰でも文字表を片手にもとの文字列を正確に復元することができる。

の視覚的配置は子音と母音の間にある時間の隔たりを見事に表現していると言えるだろう。ところが、これをラテン文字で線条的に転写すると、子音と母音が入り乱れてしまい、時代錯誤に陥る危険性がある。そういう意味でも、聖書ヘブライ語の言語データはやはりヘブライ文字で引用するのが理想的である。

このようにもとの文字と転写された文字との間に規則的な対応があり、もとの文字列が正確に復元できるような転写は広く「翻字」(transliteration)と呼ばれる²⁰。それに対して、(1)のように音声言語を取り出すだけの転写は transcription と呼ばれる²¹。本稿では、これを「音訳」と呼んで翻字と区別することにする²²。類型が同じ文字間の転写では翻字と音訳にほとんど違いがない場合もあるが、種類の異なる文字間で転写をおこなう際には両者の区別が重要となる²³。子音文字であるヘブライ文字を単音文字であるラテン文字で転写する場合も例外ではない。

表1における *matres lectionis* の扱いを例にとると、Tsumura と Ikeda の転写からはヘブライ文字のつづりが正確に復元できる。一方、Rendsburg と Izre'el は転写の際に *matres lectionis* を捨象するため、転写から *matres lectionis* を復元することはできない。この点に関するかぎり Rendsburg と Izre'el の方式は音訳に近く、翻字としては Tsumura と Ikeda の方式の方が優れていると言えよう。このうち、実際には発音されない肩付きの \aleph や \yod がいちいち書かれている Ikeda の翻字は煩雑に見える。Tsumura の翻字にはそのような問題はなく、読みやすい。ただし、Tsumura の翻字にも難点がないわけではない。特に、*matres lectionis* があたかも母音の長さを表示しているかのような誤解を与えかねない点が気になる。ヘブライ文字の構成要素を一つ一つ正確にラテン文字に置き換えるのが翻字の役割であることを考えると、多少の読みにくさには目をつぶり、少しでも誤解の少ない翻字方式を選択するのが良策ではないだろうか。また、Ikeda の翻字には *matres lectionis* を肩に上げることにより、言語機能をもつ記号とたない記号とを区別できるというメリットもある。

翻字の役割に考察が及んだところで、筆者は翻字にもう一つ重要な役割

²⁰Coulmas (1996:510-512) 参照。transliteration の日本語訳については、『学術用語集：言語学編』にならった。

²¹Coulmas (1996:509-510) 参照。

²²『学術用語集：言語学編』は transcription を「転写」ないし「表記」と訳すが、本稿では「転写」を transliteration と transcription の総称として用い、transcription には「音訳」という独自の訳語をあてることにする。

²³たとえば、アッカド文字(アッカド語式音節表語限定型シュメール系文字)をラテン文字で表記する際には翻字と音訳が徹底して区別される。ちなみに、本稿における転写方式はアッカド文字の転写方式から多くの着想を得ている。

を与えたいと思う。それは字節境界の表示である²⁴。字節とは、形状としてひとまとまりをなす視覚的単位である（福盛・池田(2002:33)）。日本語の例(3)で示したように、字節境界記号（この場合はハイフン）をつけると、文字の構成や配列が明瞭になる。上の例では字節がたまたま音節ないしモーラに対応するため、境界記号がなくても字節がある程度推定できるが、たとえば「KANGAeru」という転写があった場合、日本文字を知らなければこれが何字節からなるのかを知る由はない。しかし、「KANGA-e-ru」と翻字すれば、これが3字節をもつことが一目瞭然となる。KANGAのように言語的単位（音節、形態素等）に一致しない字節を転写において示すには字節境界記号が不可欠である。ヘブライ文字の字節は子音文字、母音記号、ダゲシュ等の字素²⁵からなり、言語的単位に必ずしも一致しない視覚上の単位を構成する。字素と字節の関係はほぼ規則的な対応をなすが、後述するように完全に予測可能ではないため、転写から字節を正確に復元するためには字節境界記号が必要である。

以上は翻字に関する文字学的考察であったが、音訳においては言語的機能をもたない表記要素は転写する必要はない。ふたたび表1における *matres lectionis* の扱いを例にとると、Tsumura と Ikeda の転写方式は聖書ヘブライ語において弁別的でない *matres lectionis* を表記している点で無駄がある。それに対して、*matres lectionis* を無視して転写をおこなう Rendsburg と Izre'el の方式の方が音訳としては優れている。Rendsburg はへーに限って *matres lectionis* を表記しているため、Izre'el の方式が音訳としては最も優れている。さらに、シュワの扱いに関しても、Izre'el の方式は異音にとらわれず音素表記（ゼロ）に徹している点で優れた音訳である²⁶。

音素表示に徹するなら、複合シュワもゼロで表記すべきであろう。複合シュワは超短母音ではなく、シュワの異音の読み方を示した記号にすぎないからである。しかし、複合シュワの運用には恣意的な部分があるため²⁷、

²⁴ 高橋洋成の提案による。

²⁵ 字節の構成要素（漢字の部首やかなにおける濁点など）を字素と呼ぶ（福盛・池田(2002:33)）。

²⁶ Izre'el 自身、私信の中で彼の用いた転写方式が *transliteration* ではなく *phonemic transcription* であると認めている。

²⁷ 喉音に対しては（無音の異音を除き）常に表示される。しかし、喉音以外の子音に対しては恣意的に運用され、写本間の不一致も多い。詳しくは、Khan (1997:95) 参照。

その分布を完全に予測することはできない。したがって、複合シュワについては、言語的機能がないことを示しつつ、その音色を示すような表記方法が必要となる。その意味で、複合シュワにセゴル、パタハ、カメツと同じ記号を使ってその音色を示し、肩に上げることによって言語的機能がないことを示す Izre'el と Ikeda の転写方式は絶妙な妥協点だと言える。

2.3 第3の転写方式の必要性

翻字、音訳に加え、ヘブライ文字の場合、第3の転写が必要となる場合が少なくない。それは、母音記号を無視して子音のみを表記するような転写である。これを子音転写と呼ぶことにしよう。実際に、聖書テキストを引用した文献を見てゆくと、聖書ヘブライ語を（翻字ないし音訳ではなく）子音転写したものが散見される。その多くは次のような事情から子音転写を選択している。学術誌の投稿規程や出版社の技術的問題によりヘブライ文字の使用が許されない場合がある。その場合、聖書ヘブライ語をラテン文字で転写することが必要となる。ところが、上で述べたように、驚くほど多くの転写方式があるため、どれを選んだらよいか迷うことも少なくない。また、どれを選んだにせよ、母音記号を含めて聖書テキストをラテン文字で正確に転写するのは非常に骨の折れる作業である。その際、子音テキストのみをラテン文字に転写すれば、こうした重荷から開放される²⁸。語形の詳細を問題にせず大まかな文意や文脈を提示するには子音転写で十分であるし、ティベリア式母音記号を介さずに聖書時代のヘブライ語を問題にする場合にはむしろ子音転写を用いる方が好都合である。

子音転写が不可欠となる場合も考えられる。たとえば、ヘブライ語聖書の死海写本の転写がよい例である。死海写本は母音記号が考案される前に書かれた写本であるため、子音と *matres lectionis* しか書かれていない。そのため、通常の翻字や音訳をすることができない。したがって、死海写本をラテン文字で表記するには子音転写を用いるしかない。同じことが、聖書時代に書かれたヘブライ語碑文にも当てはまる²⁹。また、聖書中には

²⁸ 子音の転写方式にも多少のバリエーションはあるが、母音記号や補助記号（ダゲシュ等）の転写に比べればバリエーションははるかに小さい。

²⁹ これらのヘブライ語碑文は聖書テキストではないが、時代区分としては聖書ヘブライ語に分類される。

暗誦された語形（ケレー）が書かれた語形（ケティヴ）と食い違う箇所が散見される。写本におけるケティヴとケレーの表示方法にはいくつかあるが、ケティヴの子音に（それとは食い違う）暗誦された母音記号を付け、欄外に暗誦された語形の子音を記す場合が多い。このような場合、本文に書かれた子音と母音はそれぞれ別の語に属するため、両者を組み合わせても語にならないことが多い。したがって、ケティヴとケレーを分け、前者を子音転写し、後者を翻字ないし音訳するしかない。

2.4 IPA の使用

本稿が目指すのは、言語学者一般に分かりやすい転写方式の確立である。言語学者一般に最も分かりやすいのはおそらく IPA による転写であろう。そのため、個々の文字の転写にはできるかぎり IPA を使うべきである。たとえば、アレフとアインは伝統的に 'ʾ', 'ʾʾ', 'ʾʾʾ' 等の記号によって転写されてきたが、やはり ? と ʔ を用いるのが言語学者には最も分かりやすいと思われる。また、â や æ は多くの言語学者が理解できると思うが、それぞれ ɔ̃, ɛ と書いた方が一層分かりやすい。

しかし、IPA ではなく伝統的な表記を用いた方がよいと思われる場合もある。まず、ベート [b]、ギメル [g]、ダレット [d]、カフ [k]、ペー [p]、タウ [t] は単独で母音に後続する環境で摩擦音化する。IPA に従うとそれぞれ v, γ, ð, x, f, θ と表記すべきところであるが、こう表記するとこれらが b, g, d, k, p, t と同じ文字で書かれていることが判然としない。同様に、スィンとシンをそれぞれ ʃ, ʒ と表記すると、これらが同じ文字で書かれている事実を示すことができない。言語学者一般にとっての分かりやすさを多少犠牲にしても [b] と [v]、[g] と [γ]、[d] と [ð]、[k] と [x]、[p] と [f]、[t] と [θ]、[ʃ] と [ʒ] とがそれぞれ同じ文字で書かれていることを暗に示すことのできる転写の方が文字学的に優れていると言える。また、聖書ヘブライ語の強勢音（テット [t̪], ツァデー [s̪], コフ [k̪]）はおそらく咽頭化音であったと推定されるが、決定的ではない。この場合、下に点を打つあいまいな表記をあえて用いることにより正確な音価を保留することができる。同じことがスィンの音価 [ʃ] についても言える。

3 既存の表記方式

既存の表記方式は数多くあるが、それをまとめた論文として Weinberg (1970) が挙げられる。ただし、この論文は現代ヘブライ語も含めて転写の問題を論じている。そこで、本節では、まず Weinberg (1970) から聖書ヘブライ語に関わるものを取り出して紹介する³⁰。そのうえで、1970年以降に出版された文献で用いられている方式をいくつか紹介することにより、最近の動向をさぐりたいと思う。

3.1 子音の表記 : Weinberg (1970) による概観

Weinberg (1970) でリスト化されている種々の子音表記の方式は、より厳密なラテン文字表記法 (narrow romanizations)³¹ と大まかなラテン文字表記法 (broad romanizations)³² とに大別される。これらで用いられている翻字をリストアップすると、表5 (p.74) のようになる³³。なお、よく使われるものは太字で示した³⁴。また、ラメッド、メム、ヌン、レーシュはすべての方式で l, m, n, r と翻字されるため、表5では省略した。

³⁰Weinberg はこの論文の中で最終的に3つの方式 (narrow transliteration, phonemic transcription, popular transcription-transliteration) を提案している。そのうち、聖書ヘブライ語の表記に関わりの深い narrow transliteration が本稿の3.1と3.3に組み込まれている。

³¹narrow romanizations としてリストアップされているのは、19世紀から20世紀に書かれた聖書ヘブライ語の古典的な文法書や旧約聖書に関するモノグラフ23点 (table I)、学術誌、辞典類、表記の標準化の試み16点 (table II) である。このうち、主に現代ヘブライ語を対象とした方式を本稿の考察から除外した。

³²broad romanizations としてリストアップされているのは、16世紀から1960年代までに用いられた22の方式であるが、約半分は現代ヘブライ語を対象とした方式であるため、本稿の考察からは除外した。また、中世の文献の表記方式は19世紀以後の表記と質的に異なり、一概に比べることができないので、本稿では触れない。なお、この Weinberg (1970) には popular romanizations のリストもある。これはユダヤ人の出版物や人名などに用いられてきた方式であり、聖書ヘブライ語のラテン文字転写とは直接関わりがないので扱わないことにする。

³³以下の表で「-」はゼロ、すなわち「表記しない」ことを示す。

³⁴ほとんどの narrow romanizations では b, g, d, k, p, t の摩擦音と閉鎖音を区別して翻字するが、両者を区別せずに用いるものもあるため、よく使われる方式を決めるのが困難である。詳しくは Weinberg (1970:§4.1.1) を参照。

| | Narrow Romanizations | Broad Romanizations |
|----|--|---------------------|
| ㄅ | ʔ, ʔ̄, -, a, o | ʔ, - |
| ㄆ | b | b |
| ㄇ | b, bh, <u>b</u> , <u>b</u> , v, β, <u>b̄</u> | v, b |
| ㄏ | g | g |
| ㄏ̄ | g, gh, <u>g</u> , <u>g</u> , ʔ, <u>ḡ</u> , <u>ḡ</u> | g |
| ㄉ | d | d |
| ㄉ̄ | d, dh, <u>d</u> , <u>d</u> , <u>ḏ</u> , <u>ḏ</u> , <u>d̄</u> | d |
| ㄏ | h, ḥ | h |
| ㄨ | w, v, u, <u>u</u> | v, w |
| ㄗ | z, s, ds, <u>s</u> | z, s |
| ㄗ̄ | ḥ, h, ḥ, ch, <u>ch</u>, hh, ^ch, <u>h̄</u>, x | ḥ, h, ch |
| ㄗ̄ | ṭ, t, th, T | t, ṭ |
| ㄗ̄ | y, j, i, <u>i</u> | y, i, j |
| ㄗ̄ | k, ch, c | k |
| ㄗ̄ | k, kh, <u>k</u> , <u>k</u> , x, ʔ, ch, <u>ch</u> | kh, k, ch |
| ㄗ̄ | s, ʂ, ʂ | s, ss |
| ㄗ̄ | ʔ, ʕ, gh, -, o, H, &, ʕ, ʔ̄ | ʕ, - |
| ㄗ̄ | p | p |
| ㄗ̄ | ph, <u>p</u> , <u>p</u> , f, φ | f |
| ㄗ̄ | ʂ, z, z, z, ths, tz, ts, ʂ, β | ʂ, ʂ, z, tz |
| ㄗ̄ | q, k, k̄ | q, k, k̄ |
| ㄗ̄ | ś, ʂ, ś, s | s, ss |
| ㄗ̄ | š, s, ś, sh, sch, <u>sch</u> | sh, s, sch |
| ㄗ̄ | t, th | t |
| ㄗ̄ | t, <u>t</u> , th, θ, <u>θ</u> , p | t, th |

表 5: 子音の転写 (～1970)

3.2 子音の表記：その他の表記方式

さて、Weinberg (1970) 以後の文献で子音はどのように表記されているのだろうか。代表例として、Lambdin (1971) と Joüion-Muraoka (1996)³⁵ と Huehnergard (2000)、そして Meyer (1992) の4つを見てみよう。表6 (p.76) から、Weinberg (1970) 以降、子音の翻字に用いられるラテン文字がかなり整理されてきていることが分かる。ばらつきが見られるのは、ベート、ワウ、ヨッド、カフ、ペー、コフのみである。このうち、ベート、カフ、ペーには上で述べたダゲツシュが絡んでいる。ベート [b]、ギメル [g]、ダレット [d]、カフ [k]、ペー [p]、タウ [t] は母音に後続する環境で摩擦音化するが、摩擦音化した文字はダゲツシュをとらない。Lambdin 方式では b、g、d、k、p、t の上か下に横棒を引いてダゲツシュが付いていないことを示す (e.g. \underline{b} , \underline{p})。ベート、ギメル、ダレット、カフ、ペー、タウのすべてにこの表記を適用する点で、Lambdin と Huehnergard の方式には一貫性がある。一方、Joüion-Muraoka はこの表記法をギメル、ダレット、タウだけに適用し、ベート、カフ、ペーについてはダゲツシュの有無を別個のラテン文字で書き分ける。この違いは、翻字においてヘブライ文字との対応関係を重視する立場 (Lambdin、Huehnergard) と表音性を重視する立場 (Joüion-Muraoka) を反映したものと言えよう。Meyer は p/f に限って表音的に表記し、残りの5文字に対しては横棒を用いる点で両者の中間に位置する。

\underline{u} と \underline{i} という表記には、ワウとヨッドの半母音的性格 (4.3.3 参照) を表現するのに好都合な面もあるが、Meyer がこれらの表記を用いるのは、主にドイツ語の特殊事情によるものと思われる。ドイツ語では w が [v] を表し、[y] は j で表記されるため y という文字はほとんど用いられない。そのため、w と y の代替表記が必要なのである。したがって、このばらつきはヘブライ語にとって本質的なものではないと言える。コフに対して Huehnergard だけが \underline{k} を用いているが、これは強勢音に対して一貫した表記をおこなうための工夫である。テット、ツァデー、コフを \underline{t} 、 \underline{s} 、 \underline{q} と表記するとコフの位置づけがはっきりしないが、 \underline{t} 、 \underline{s} 、 \underline{k} と表記すればコフ

³⁵ Joüion (原著 1923 年) の方式は Weinberg に収録されているが、Joüion (1947) の英訳である Joüion-Muraoka (1996) では翻字方式が少し変化しているので、改めて取り上げることにした。

| | Lambdin | Joüon-Muraoka | Huehnergard | Meyer |
|---|-----------|---------------|-------------|-------------|
| 𐌆 | | | | ɔ |
| 𐌇 | | | | b |
| 𐌈 | <u>b</u> | v | | <u>b</u> |
| 𐌉 | | | | g |
| 𐌊 | | | | g̃ |
| 𐌋 | | | | d |
| 𐌌 | | | | <u>d</u> |
| 𐌍 | | | | h |
| 𐌎 | | w | | w (u) |
| 𐌏 | | | | z |
| 𐌐 | | | | ḥ |
| 𐌑 | | | | ṭ |
| 𐌒 | | y | | y (i) |
| 𐌓 | | | | k |
| 𐌔 | <u>k</u> | ḥ | | k |
| 𐌕 | | | | l |
| 𐌖 | | | | m |
| 𐌗 | | | | n |
| 𐌘 | | | | s |
| 𐌙 | | | | c |
| 𐌚 | | | | p |
| 𐌛 | <u>p̄</u> | f | | <u>p̄</u> f |
| 𐌜 | | | | ʃ |
| 𐌝 | | q | | ḳ (q) q |
| 𐌞 | | | | r |
| 𐌟 | | | | ś |
| 𐌠 | | | | š |
| 𐌡 | | | | t |
| 𐌢 | | | | ṭ |

表 6: 子音の転写 (1970～)

が強勢音であることが一目で分かる(4.3.2参照)。また、qと書くと、聖書時代のコフの音価が口蓋垂音であった印象を与える点で難がある³⁶。

3.3 母音の表記：Weinberg (1970)による概観

子音表記の方式と同様に、母音表記の方式も narrow romanizations と broad romanizations に大別される。それぞれに用いられている翻字を整理すると、表7のようになる。よく使われるものはやはり太字で示してある³⁷。この表から、これまでにいかに多くの転写方式が使われてきたかが分かる。

| | Narrow Romanizations | Broad Romanizations |
|-------------------|---|---------------------|
| パタハ ³⁸ | a , a, ā , ǎ , q̄ | a |
| カメツ ³⁹ | ā , a, â , ã , ā , ã , q̄ , o | |
| | o, â , q̄ , q̄ , o, ò, õ | o |
| セゴル | e , e, è , é , ě , ę , e , ε , ä , à , ǎ , æ | e |
| ツェレ | ē , e, ê , é , ē , ē , ę | |
| ヒリク | i , i, î , ī , ī | i |
| ホラム | ō , o, ô , ó , õ , ō | o |
| クブツ | u , ū , û , ũ , ou , oû | u |
| シュワ | ə, e, ^e , ^é , ^è , - | e, -, ^e |
| ハタフ・カメツ | ō , o, q̄ , q̄ , o, ǎ , ā , o , ō , ō , - | o |
| ハタフ・パタハ | ǎ , a, ǎ , ā , ā , a , - | a |
| ハタフ・セゴル | e, ě , ę , ě , é , e , ē , ę , ä , - | e |
| ツェレ・マレー | ê , e, ē , ē , é , ei , ēi , ey | e |
| ヒリク・マレー | î , i, ī , ī , y , iy | i |
| ホラム・マレー | ō , o, ō , ó , ō , ō , ow | o |
| シュルク | û , ū , u, ũ , ou , oû , w | u |

表7: 母音の転写 (～1970)

³⁶ Kahn (1997:89)によるとマソラ時代のコフは口蓋垂音であったようだが、Rendsburg (1997:71)は聖書ヘブライ語のコフを軟口蓋閉鎖強勢音と推定する。

³⁷使用頻度についての詳細はWeinberg (1970:§4.1.2)を参照。

3.4 母音の表記：その他の表記方式

最後に、3.2 節と同様に Lambdin 方式、Jöüon-Muraoka 方式、Huehnergard 方式、Meyer 方式を通して、最近の動向をさぐってみよう。

| | Lambdin ⁴⁰ | Jöüon-Muraoka | Huehnergard | Meyer ⁴¹ |
|---------|-----------------------|-------------------|-------------|---------------------|
| パタハ | a | ḡ | a | |
| カメツ | ā~o | ḡ~â ⁴² | ɔ | â |
| セゴル | e | ḡ | ɛ | œ |
| ツエレ | ē | ḡ | e | |
| ヒリク | i~ī | i | | |
| ホラム | ō | ḡ | o | |
| クブツ | u | | | |
| シュワ | ə~- | - | | e~- |
| ハタフ・パタハ | ǎ | ḡ | a | |
| ハタフ・セゴル | ě | ḡ | ɛ | œ |
| ツエレ・マレー | ê | - | | |
| ヒリク・マレー | î | | | |
| ホラム・マレー | ô | | | |
| シュルク | û | | | |

表 8: 母音の転写 (1970~)

表 8 を一見すると、母音の表記にはなおばらつき大きいように見える。

³⁸先読みのパタハ (4.4.6 参照) の翻字は含まない。

³⁹カメツには歴史的に a にさかのぼるものと、u に由来するものがある (詳しくは 4.4.1 で後述)。ヘブライ語伝統文法では、前者をカメツ・ガドールないしカメツ・ラハヴ、後者を特にカメツ・カタンないしカメツ・ハトゥーフと読んで区別する。

⁴⁰リストでは省略したが、カメツ/セゴルと *matres lectionis* としてのヨッドが共起する場合は â/ê と翻字される。また、語末で *matres lectionis* として使われるヘーがカメツ/ツエレ/セゴル/ホレムと共起している場合は āh/eh/eh/ōh と翻字される。

⁴¹Meyer は *matres lectionis* を翻字で表記しないが、*matres lectionis* とは無関係に母音の長短を判断して長母音に ˉ を付ける。これは Rendsburg と同じ方針だが、Rendsburg とは異なり Meyer は ˆ を使用しない (注 4 参照)。

⁴²Jöüon-Muraoka は基本的にカメツを ḡ で転写し (1996:34)、ティベリア式の発音ではカメツはすべて ḡ と発音されていたと考えるが (1996:44)、歴史的に a にさかのぼるカメツについては必要に応じて â と転写し、u に由来するカメツ (ḡ) と区別してもよいとする (1996:40)。筆者の見たかぎり、同書で引用される翻字ではほとんどの場合、両者が書き分けられている。

ところが、注意深く比較すると、大きく異なるのは Lambdin 方式だけで、他の3方式は次のような基本方針を共有していることが分かる。

- (1). *matres lectionis* は表記しない。
- (2). ティベリア式母音記号は母音の長さでなく音色の違いを表す。
- (3). 複合シュワは肩に上げて表記する。

ただし、次の2点において Meyer 方式は Lambdin 方式に近い。

- (1). シュワ・ナアとシュワ・ナハを書き分ける。
- (2). 何らかのかたちで母音の長短を表記する。

Huehnergard 方式の方針は基本的に Joüon-Muraoka 方式と同じであるが、前者の方が IPA に準ずる表記を用いているために、音声学的な違い(開口度や舌位置)が分かりやすい。

Lambdin のようにティベリア式母音記号や *matres lectionis* を母音の長短に結び付けて転写する方式は現在でも根強く見られるが⁴³、ティベリア式の発音をより忠実に反映した Joüon-Muraoka や Huehnergard のような方式が普及する傾向が見られる。

4 筑波方式の提案

4.1 転写の方針

さて、筑波方式を提案するにあたり、基本的な方針を確認する。

- 翻字 (transliteration) と音訳 (transcription) を区別する (2.2 を参照)。
ただし、翻字から音訳へスムーズに移行できるよう工夫したい。
- 子音転写の方法も同時に考える (2.3 を参照)。
- 言語学者一般に分かりやすいよう、できる限り IPA を用いる。ただし、伝統的な転写の方がヘブライ文字表記体系をより良く反映していると考えられる場合、伝統的転写を採用する (2.4 を参照)。

⁴³たとえば、Walke-O'Connor (1990) や、聖書テキストの検索ソフト BibleWorks に収録されている BHT (TRANSLITERATED BHS HEBREW OLD TESTAMENT ©2001) などがある。

4.2 翻字、音訳、子音転写

4.2.1 それぞれの特徴

転写とは、ある文字体系によって表記されたテキストを別の文字体系で置き換えることであるが、筑波方式では目的に応じて三種類の転写を使い分ける。すなわち、テキストの正確な復元を目指す翻字、言語機能に重点を置く音訳、そして子音転写である。

翻字とは、テキストが書かれた文字体系（ここではヘブライ文字および母音・抑揚記号など）と、転写された文字体系（ここではラテン文字）とが規則的に対応する転写である。実用的な面では、例えばヘブライ文字を使用できない環境で聖書テキストを引用しなければならない場合に、もとの文字列を正確に復元しうるものであることが望ましい。したがって、もとのテキストに書かれているものは、たとえ言語的機能の小さい（あるいは全くない）表記要素であっても、翻字においては転写し分ける必要がある。ただし、ヘブライ文字表記体系と翻字体系の個々の要素が必ずしも一対一対応する必要はなく、全体として規則的に対応していればよい。

一方、音訳とはテキストの読み方を書き写すことである。したがって、読まれない表記要素をいちいち転写する必要はない。さらに言えば、音訳の目的は文字列の復元ではなく、文字列から言語的機能をもつ要素を取り出すことによって言語を復元することだと言えよう。ただし、聖書テキストに関して言えば、音訳によって復元される「言語」とはいったい何か、という疑問を避けて通ることはできない。というのは聖書テキストというものが、もともと地理的、時代的に隔たりのあるさまざまな子音文字テキストの集合体であり、しかも母音記号に至っては子音テキストの成立からさらに千年近い時代差があるからである。現在私たちが使っている聖書テキストの母音記号は、パレスチナ北部のティベリアにおける口承に基づいている。したがって、聖書テキストを音訳するということは、聖書時代のヘブライ語を反映した要素（子音文字によって表される）と、ティベリア式の聖書朗読法を反映する要素（母音、抑揚、識別記号などによって表される）の両方を同時に写しとることを意味する。

さて、音訳の実現方法としては、音声学的なものから音韻論的（あるいは形態音韻論的）なもの、はては比較言語学的な再建に基づくものまで、

実にさまざまなものが考えられる。筑波方式はそのような音訳の可能性を否定するものではない。筑波方式では、翻字から音声的な価値をもたない表記要素を取り去るだけで音訳とする立場をとる。これには大きく2つの理由があり、一つは初学者が習得しやすいものにしたということ、もう一つは仮説に基づく要素をできるだけ排したいと考えるからである。

最後に、第三の転写として子音転写を挙げる。先に触れたように、聖書テキストはもともと子音文字のみで書かれている。したがって、聖書時代のヘブライ語の姿を問題にする場合にはティベリア式の母音記号を取り除いて考えた方がよい。また、語形の詳細を問題にせず大まかな文意を辿っていく場合には、子音だけでもさほどの困難はなく、転写の労力を減らすことができる。さらに、ヘブライ語碑文や死海文書を引用するときには、どうしても子音文字のみを転写せざるをえない。以上のような理由から、子音転写はぜひとも必要である。もともと、22個のヘブライ文字をラテン文字へ一対一に置き換えていけばよいだけなので、考えねばならないことは少ない。

以上、翻字、音訳、子音転写に関する筑波方式のスタンスを概観した。次節から具体的な提案を述べていく。

4.2.2 翻字、音訳、子音転写の基本原則

提案 1 翻字ではピリオド (.) で字節境界を示す。

提案 2 言語的機能を持たない表記要素は、翻字では肩上げにする。

創世記 1:1 を例に、原文、翻字、音訳、子音転写を示す。

[原文] בְּרֵאשִׁית בְּרָא אֱלֹהִים אֶת הַשָּׁמַיִם וְאֶת הָאָרֶץ :

[翻字] b.re.[?] šī.y.t̄ bō.ro.[?] ?^e.lo.hi.y.m ?e.t̄ ha.ššō.ma.yi.m
w.?^e.t̄ hō.?^o.re.š :

[音訳] brešit̄ boro ?^elohim ?et̄ haššōmayim w?et̄ hō?oreš :

[子音転写] br?Št̄ br? ?lhym ?t̄ hŠšmym w?t̄ h?rš

[日本語訳] 初めに、神は天地を創造された。

ヘブライ文字をラテン文字転写するとき、たとえば **ר** という一つの字節に対して re という二つの字節があてられる。両者の文字体系が異なる

以上避けられないことなのだが、誤解を生む場面もある(4.6で後述)。そこで、筑波方式の翻字では、ピリオドによってヘブライ文字における字節境界を示すことにする。このようにすると、翻字がヘブライ文字体系をより忠実に反映したものとなり、テキストの復元が容易になる。

また、*matres lectionis* などの言語的機能を持たない表記要素については、翻字では肩上げして表記する。翻字から音訳へは(1)字節境界を示すピリオドと(2)肩上げた表記要素を取り去る、という簡単な作業で移行できる。ただし、読みやすさを考慮して、言語的機能をもたなくても音声実体をもついくつかのもの(上記の例では複合シュワの^ε)については音訳でも省略しない⁴⁴。

子音転写では、マソラ学者が考案した各種記号(母音、抑揚、その他)を考慮に入れる必要がないので、文字が読まれるかどうか、あるいは子音が重複するか、などとは一切関係なく、一字ずつ転写していけばよい。

4.3 ヘブライ文字の転写

まず、筑波方式のヘブライ文字転写に用いるラテン文字の一覧を表9(p.83)に示す⁴⁵。

4.3.1 閉鎖音と摩擦音

提案3 翻字、音訳では、弱ダゲシュがある **בּ, גּ, כּ, פּ, תּ** と、弱ダゲシュが無い **ב, ג, כ, פ, ת** とを転写し分ける。

ダゲシュとは文字の中央に打たれる点のことで、その働きは2種類に大別される⁴⁶。第一の働きは子音の重なりを示す「強ダゲシュ」であり、ほとんどの文字に付けられうる⁴⁷。強ダゲシュについては当該ラテン文字の重ね書きによって転写を行う⁴⁸。第二の働きは子音の閉鎖性を示す「弱ダ

⁴⁴この場合でも、それが言語的機能をもたない要素であることが肩上げ表記によって一目瞭然である。

⁴⁵表の調音点および調音様式はあくまで目安であり、正確な音声学の実態が不明な音価も少なくない。

⁴⁶働きが不明なダゲシュもわずかに存在する。Blau (1976:§4.2.)を参照。

⁴⁷強ダゲシュが付かない文字としては、喉音とよばれるアレフ、ヘー、ヘット、アイン、そしてレーシュである(ただしレーシュとアレフには例外がある)。これらの子音の重なりは、直前の母音の代償延長によって間接的に示される場合がある。

⁴⁸例えば、**בּבּבּ**「彼は言った」の翻字、音訳はそれぞれ di.bbe.r, dibber となる。なお、

| | 閉鎖音 | 摩擦音 | 強勢音 | 共鳴音 |
|------------------------|-------------|---|------------------|----------------------------------|
| 唇音 | פ (p) ב (b) | פ (p̄) ב (b) | | מ (m) |
| 歯音 / 歯茎音 / 後部歯茎音 | ת (t) ד (d) | ת (t̄) ד (d̄) ס (s) ז (z) ש (š) ז (ś) [ש (š̄)] | ט (t̄) צ (s̄) | נ (n) ו (w) י (y) ל (l) |
| 軟口蓋音 | כ (k) ג (g) | כ (k̄) ג (ḡ) | ק (k̄) | ר (r) |
| 喉音 | ח (?) | ח (h) ע (ʕ) ה (h) | | |

表 9: 筑波方式のヘブライ文字転写

ゲシュ」であり、ב、ג、ד、כ、פ、תの6つの文字のみに付けられる⁴⁹。弱ダゲシュが打たれていない場合、これらはいいてい母音に後続する環境に分布しており、おそらく摩擦音 (IPA で表せばそれぞれ [v y ð x f θ]) であったと推定される⁵⁰。一方、弱ダゲシュが打たれた場合にはより強い (すなわち閉鎖性の) 発音であったと考えられ、IPA ではそれぞれ [b g d k p t] と表すことができる。

これらの閉鎖音と摩擦音のペアは位置異音として解釈しうる。したがって弱ダゲシュの有無-すなわち閉鎖音と摩擦音-を転写し分ける必要はないかもしれない。ところが実際には、弱ダゲシュの出現は必ずしも予測可能ではない。例えば לָקַחְתָּ 「彼女は取った」のような動詞人称接尾辞のタウは、母音直後であるにもかかわらず常に弱ダゲシュと一緒に現れる

翻字において字節境界と音節境界が一致しないことに注意。

⁴⁹強ダゲシュと弱ダゲシュは出現位置でほぼ区別できる。すなわち、母音が先行しない b g d k p t に付くダゲシュは弱ダゲシュであり、母音が先行する子音に付くダゲシュは強ダゲシュである。

⁵⁰[v]、[f] に関しては [β]、[φ] であったかもしれないが、類型論的に見て前者の可能性の方が高い。

(cf. לָקַחְתָּ 「取ること(不定詞)」)。また、名詞においても、מַלְכֵי עַמִּים 「民達の王達」のカフは、直前に母音が無いにもかかわらず弱ダゲシュが付いていない⁵¹。つまり、弱ダゲシュは形態論とも深くかかわっており、必ずしも音韻環境だけで説明できないのである。以上の理由により、弱ダゲシュの有無は転写し分ける必要がある。

では、どのように転写するのがよいだろうか。もし IPA を採用した場合、[b v][g ɣ][d ð][k x][p f][t θ] という転写文字のペアが生まれる。だが、これらのペアからヘブライ文字表記における「一つの文字を弱ダゲシュの有無によって発音し分ける」というシステムを想像することは難しく、あたかも全く別々の文字ないしは音素であるかのように誤解されるおそれがある。誤解の余地の少なさという面から考えれば、ここでは伝統的な線引き文字 (b, g, d, k, p, t) を採用した方が、文字学的にも、また音韻論的にも都合がよい。したがって、弱ダゲシュの付いた閉鎖音の転写には b, g, d, k, p, t をあて、その線引き文字を弱ダゲシュが付かない摩擦音の転写にあてるのがよいと思われる⁵²。

なお、子音転写の場合にはダゲシュを考えなくてよいので、線引きでないラテン文字をそのまま用いて構わない⁵³。

4.3.2 強勢音

提案 4 ט, ש, ק をそれぞれ t, s, k で転写する。

聖書ヘブライ語の強勢音に関しては未解明な部分が多いが、おそらく喉頭化音あるいは咽頭化音であったと推定される。ちなみに、現代ヘブライ語では ט と ת (t)、ק と כ (k) の発音上の区別は失われており、また ש は破擦音 [ʃ] として発音されている。

これら強勢音のラテン文字転写では、伝統的に ט (t)、ש (s)、ק (q) を

⁵¹ 伝統的には、直前の無音シュワが歴史的に母音起源のものであるため、後続する子音が摩擦音化したまま固定されたと説明される (いわゆる中間シュワ (šwa medium))。Blau (1976:§4.1)、Joüon-Muraoka (1996:§8 e) を参照。

⁵² ヘブライ文字では弱ダゲシュの無い摩擦音が無標だが、ラテン文字転写では閉鎖音が無標となる。

⁵³ ただし、例えば子音転写の b においては、表記上 b と b̄ とが中和されている点に注意を要する。

あてることが多い。上述したように強勢音の具体的な音価はわからないので、ここで無理に IPA を用いる必要はないだろう。むしろ、音価の決定を保留していることを暗に示しうる点で、これらの伝統的な転写文字は優れているとも言える。ただし、 p の転写文字が q では IPA の $[q]$ と紛らわしい⁵⁴ので、他の二つの強勢音に合わせて下点付き文字の k をあてたい。このようにすると、転写文字体系において「強勢音は下点付き文字で表す」という一貫性が生まれる。さらに、 p の強勢音としての位置付けがはっきりするため、セム諸語の子音体系の特徴の一つである無声 ($t\ s\ k$)、有声 ($d\ z\ g$)、強勢 ($\text{t}\ \text{s}\ \text{k}$) という三項対立をより明瞭に表すことができる。

4.3.3 共鳴音

共鳴音について特に注意すべき点は以下の通りである。

提案5 r は r 、 y は y で転写するが、これらは IPA ではなく伝統的な表記である。

聖書ヘブライ語の r の音価も未解明な部分が多い。子音重複が必要な場面においても r は重複しないなど、喉音と同じような特徴を示すこともある。だが、そのことによって直ちにレーシュと口蓋垂音(はじき音ないしふるえ音)とを結びつけることはできない⁵⁵。ここで r の音声実体の問題に深入りすることは避けるが、ただ、筑波方式における r の転写文字 r は、IPA の $[r]$ (歯茎震え音)ではなく、具体的な音価決定を保留した伝統的な転写文字としての r であることに注意を要する。

同様に、 y の転写文字である y も IPA の $[y]$ (円唇前舌狭母音)ではなく、伝統的な表記としての y である。 y は音声学的には接近音であるから、IPA を用いるのであれば $[j]$ を用いるのが妥当であろう。だが筑波方式で、あえて IPA ではなく伝統的な表記を採用した理由は、聖書ヘブライ語における r と y の特別な性格にある。これら2つは子音性がそれほど強いものではなく、音韻論や形態論の中であたかも母音のように振る舞うことが多いので⁵⁶、伝統的に「半母音」とも呼ばれている。 r と y を含む動詞や名

⁵⁴ コフの音価問題については注36を参照。

⁵⁵ 発音の困難さという点では、歯茎はじき音あるいはふるえ音の重複も大差ない。ちなみに、姉妹言語である現代アラビア語のラーの発音は歯茎ふるえ音である。

⁵⁶ アラム語の影響の強い後期聖書テキストの中には子音性の強い r と y も現れることがあ

詞の語形変化はたいてい不規則であり、語源的に母音であったと考えられるものも少なくない⁵⁷。したがって、' を IPA の j で転写するよりは、伝統的な y を用いた方が「半母音」としての' の性格を的確に表しているのではないだろうか⁵⁸。なお、' に関しては w 以外に適切な選択肢が見つからず、また誤解の余地もほとんどないので、w を採用する。

4.3.4 歯擦音

提案 6 𐤃、𐤄 を翻字、音訳するときは伝統的な ś, š を用いる。さらに子音転写では ʃ に対し Š をあてる。

表 4 ですでに示したように、聖書時代の終わりには 𐤃 という 1 つの文字に対して 2 つの音価が存在していた。1 つはセム祖語の *ʃ に対応するが、やがて ס (s) と融合した [s] である。もう 1 つはセム祖語の *š または *ʃ に対応する [ʃ] であり、聖書ヘブライ語ではこちらの方が圧倒的に数が多い。マソラ学者は 𐤃 の左右の肩に点を打ち分けることで、2 つの読みを区別した。

さて、筑波方式の翻字および音訳では ס、𐤃、𐤄 をどう転写するのがよいだろうか。IPA を用いるという原則に従えば、それぞれの音価は [s sʃ] と表せる。だがこれでは ס と 𐤃 を翻字上区別することができない⁵⁹、また、𐤄 という 1 つの文字を読み分けているという文字学的な情報を [sʃ] というペアから読み取ることは難しい。したがって、ここでは伝統的な s, ś, š という転写文字を採用するのが無難であろう。むしろ、この転写文字はヘブライ文字における ס、𐤃 の音声の類似と、𐤃、𐤄 の字節内における字素の違いを文字学的に反映しているという点で、大変優れた方法と言える。

さて、そうすると、𐤄 の子音転写には ś でも š でもない第三の転写文字が必要である。文字学的に一番よいのは s であるが、これは ס の転写文

る。e.g. סִפְּרָא (エス 9:31)

⁵⁷たとえば、第二語根素に w あるいは y をもつヘブライ語語根の多くは、語源的に長母音を持っていたとする説もある。

⁵⁸付け加えるなら、j は英語圏における [ʃ] の発音と紛らわしい。

⁵⁹音訳でも ס と 𐤃 は区別しておいた方がよい。というのは、セム諸語の歯擦音は諸言語の間で複雑な対応を示しており、実際の音価がどのようなものであったかは推測の域を出ないからである。

字としてすでに使用されている。次の候補として ʃ を考えてみるが、これもやはり ʃ の転写と（特にイタリック体にした場合に）紛らわしい。そこで、筑波方式の子音転写では大文字の Š を用いることにする。なぜここで Š ではなく š なのかと言え、 š の字素が ś と s の字素を両方とも含んでいおり、中和された ś と s を表すのに最も適した転写文字と考えられるからである。また、前述したように、聖書ヘブライ語では š よりも š の方が圧倒的に数が多いというのも理由の1つである⁶⁰。

4.3.5 喉音

提案7 ħ 、 ʕ 、 ʁ 、 ʕ はそれぞれ ʔ 、 h 、 h 、 ʕ と転写する。

喉音の種類が豊富なことはセム諸語の特徴の一つである。

さて、 ʕ は無声声門摩擦音であるから h で転写してよい。 ħ と ʕ はそれぞれ声門閉鎖音、有声咽頭摩擦音であり、伝統的に ʔ 、 ʕ と転写されてきた。だが筑波方式では IPA を用いて ʔ 、 ʕ と転写を行う。また、 ħ は無声咽頭摩擦音で、従来 h と転写されてきたが、これだと強勢音と紛らわしいので、IPA の ħ を用いた方がよい⁶¹。

4.3.6 語末形

提案8 語末形は転写し分けない。

q 、 q 、 q 、 q 、 q の五文字はそれぞれ語末形という特殊な形 q 、 q 、 q 、 q 、 q をもつ。一つの音価に対し複数の文字を割り当てるというシステムは一見非効率だが、「視覚的に語境界を示す」という点で、文字論的には

⁶⁰筆者らの話し合いの中で最もよいと思われた提案は、左側に点が打たれた š を ś 、右側に点が打たれた š を s とし、双方が中和された š に対しては s と転写文字を割り当てることであった。しかし、 ś と s が従来の表記と衝突してしまうために混乱を招くということで、今回は提案を見送った。もしもこの提案が一般に受け入れられるなら、他のラテン文字（例えば c 、 c 、 c ）にも拡張していくことで、文字学的にもっと一貫性のある転写体系を構築することも可能であろう。

⁶¹セム祖語の段階では三つの h 、すなわち *h *h *h が存在していたと推定され、アラビア語などではこれらが保存されているが、聖書ヘブライ語では h が h に融合し、またアッカド語では h h h がアレフと h に融合した。つまり、伝統的な h は比較言語学的な観点からは都合がよい表記である。

合理的なシステムと言える。いずれにせよ、語末形の出現は完全に予測可能であるため、転写で書き分けることはしない。

4.4 母音記号の転写

4.4.1 母音

提案 9 母音記号の転写は IPA を用いて行う。

聖書時代のヘブライ語ではおそらく母音の長短が弁別的であったと推定されるが、時代が下ったティベリア式の朗読伝統においては、母音の長短は音色の差に取って代わられた。表 10 で示すように、ティベリア式の母音記号は母音の長短ではなく音色の差を表しており⁶²、IPA の母音図ときれいに対応する。

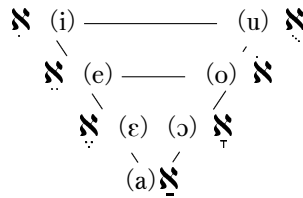


表 10: 筑波方式の母音記号転写

提案 10 カメツ (𐤀) は一貫して *o* で転写する。

さて、筑波方式ではいわゆるカメツ・ガドールとカメツ・カタンとの区別をしない。歴史的に見ればカメツは **u* と **a* が部分的に融合したものであるため、伝統的に両者を発音し分けている⁶³。しかし、母音記号から明らかのように、ティベリア方式では両者の発音に違いは無かった。両者を発音し分けるようになったのは、おそらくバビロニアの朗誦伝統の影響と考えられる⁶⁴。

⁶² 音韻論の面からそれぞれの母音に対して長短の区別を考えることも可能である。詳しくは Joüon-Muraoka (1996: §6 e) を参照。

⁶³ 原則としてアクセントのない閉音節では *o* [ɔ]、それ以外では *a* [ā] と発音されている。

⁶⁴ だが、カメツの読み分けに対する疑いの声はかなり早い時期から存在した。詳しくは Joüon-Muraoka (1996: §6 g n.4)。また、本稿の注 12 も参照。

カメツの読み分けは語源的な判断を含む仮説的なものに過ぎないので、筑波方式ではカメツを読み分けず、一貫して c で転写しておく。

4.4.2 シュワ

提案 11 シュワ (N) は「ゼロ母音」を示すものであるため、転写記号をあてない。

シュワは「ゼロ母音」を示す記号であるが、伝統的にはこれを2種類に区別し、読み分けている。1つは歴史的に母音が存在していたが、アクセントの移動によって母音が弱化したシュワ・ナア(有音シュワ)、もう1つはもともと母音が存在しないシュワ・ナハ(無音シュワ)である。両者は音節構造に基づいてある程度までは予測可能である⁶⁵。だが、厳密には形態論的な規則、通時的な基準、他のセム諸語との比較などを通して聖書テキストの個々のシュワを検討しなければならず、多分に仮説的な要素を含んでいる。したがって、筑波方式ではシュワの読み分けをせず、一貫して「ゼロ母音」と見なす。

たとえば、以下は従来シュワ・ナアとシュワ・ナハのミニマルペアとされている⁶⁶。

הַיְהוּדָהּ «彼女が賢かった」 v.s. הַיְהוּדָהּ «知恵」

יִירָאוּ «彼らは恐れる」 v.s. יִירָאוּ «彼らは見る」

これを筑波方式で翻字・音訳・子音転写すると次のようになる(翻字/音訳/子音転写の順に示す。なお、後述するように、accent grave はメテグを表す(4.5.3))。

hò.ḵ.mò.^h / hòḵmò / hkmh v.s. hō.ḵ.mò.^h / hōḵmò / hkmh

yì.y.r.ʔ.u^w / yirʔu / yyrʔw v.s. yi.r.ʔ.u^w / yirʔu / yrʔw

⁶⁵詳しくは Blau (1976:§4.1.)、Joüon-Muraoka (1996:§8 b) を参照。また、本稿の注3も参照。

⁶⁶Blau (1976:§4.1.) では、この二つのシュワは弁別的(ただし、機能的役割は小さい)であると述べている。だが、このミニマルペアを成立させる要因がシュワ・ナアとシュワ・ナアによるものとは必ずしも言えない。メテグ(母音記号の横に添える縦棒)によって示されるアクセントの有無が関係するかもしれないし、あるいは、それぞれのペアは完全な同音異義であるが、表記上は語を区別したいためにメテグや *matres lectionis* を利用しただけという可能性もある。

4.4.3 複合シュワ

提案 12 複合シュワ (𐤀、𐤁、𐤂) は ϵ 、 a 、 o のように音色を右肩に上げて転写する。

複合シュワは音韻論的にはゼロ母音であるが、何らかの原因によって明瞭な音色をもつものである。たとえば喉音にシュワが付いて「母音無しの喉音」を発音するとき、発音を助けるための音色が生じる。つまり、複合シュワは音声学的には存在しているものの、言語的機能を担っておらず、シュワの異音に過ぎない。ところが、複合シュワの3つの音色がいつ、どのように現れるかについては音韻論的、形態論的、あるいは歴史的要素が絡み合っており⁶⁷、必ずしも予測可能とは言えない⁶⁸。

複合シュワの音声学的・音韻論的な性格についてはこれ以上触れず、ここでは「音韻論的にはゼロ母音である可能性が高いが、どの音色が現れるかは完全には予測できない」という程度に留めておく。さて、音韻論的に意味のない表記要素を転写する場合、翻字で肩上げし、音訳では省くのが筑波方式の方針である。だが、すでに見てきたように、どの音色が現れるかは必ずしも予測可能ではない以上、読みやすさを考慮して、音訳でも複合シュワを肩上げしたまま省かずにおく。

אלהים 「神」 $\text{?}^{\epsilon}.\text{lo}.\text{hi}.\text{y}.\text{m}$ / $\text{?}^{\epsilon}\text{lohim}$ / $\text{?}^{\epsilon}\text{lhym}$

אשר 「(関係代名詞)」 $\text{?}^a.\text{š}^{\epsilon}.\text{r}$ / $\text{?}^a\text{š}^{\epsilon}\text{r}$ / $\text{?}^{\text{š}}\text{r}$

קֹדֶדוֹ 「彼の頭」 $\text{k}^{\circ}.\text{d}.\text{k}^{\circ}.\text{d}.\text{o}^w$ / $\text{k}^{\circ}\text{d}^{\text{k}^{\circ}}\text{d}^{\circ}$ / $\text{k}^{\text{d}}\text{k}^{\text{d}}\text{w}$

4.4.4 Matres Lectionis

提案 13 Matres lectionis は翻字で肩上げし、音訳では省略する。

ヘブライ文字では一部の子音文字 (𐤀、𐤁、𐤂、𐤃) を母音を示すために用いることがあり、このような用法を *matres lectionis* と呼ぶ。この用法は

⁶⁷ Joüon-Muraoka (1996:§9) を参照。

⁶⁸ 例えば次のようなミニマルペアを見つけることができる。

אֲנִיָּהּ 「船」 v.s. אֲנִיָּהּ 「喪」、 חֲלִיָּהּ 「病」 v.s. חֲלִיָּהּ 「飾り」

ただし、これをミニマルペアとみなすかどうかについては、異論もある (Khan 1997:95-98)。

時代が下るにつれて多くなっていくが、一貫した表記法として確立するには至らなかった(2.1を参照)⁶⁹。

matres lectionis は文字としての音価を失った「読まれない文字」なので、音訳では省略する。しかし翻字では、読まれない表記要素であっても何らかの形で転写しておかなければならない。たとえば、בְּנֵי «建てよ(impv.)»とבְּנֵי «~の息子達」は同音異義であり、音訳では両者を区別せず bne と転写して構わない。しかし翻字では、各文字列のスペリングを復元するために語末のへーとヨッドを転写しておかねばならない⁷⁰。そこで、翻字の際には本来の子音音価を肩に上げ、それぞれ b.ne.^h、b.ne.^y と転写しておく。こうすることで、その要素が表記上は存在するけれども発音されないことが明確に示される。なお、子音転写では表記要素が言語的機能をもつかどうかを問題にしないので、母音文字を肩上げする必要はない。

以下に転写例を挙げる。

וְקָם «彼は立ち上がる」(ホセ 10:14) k̄.ʔ.m / k̄om / k̄ʔm

וְקָיָא «無垢な」(ヨナ 1:14) n̄.k̄i.^{y.ʔ} / n̄k̄i / nk̄yʔ

なお、マピク(文字が母音文字でないことを明示する記号)は自ずと区別される。すなわち、マピクが付いた文字は翻字で右肩に上げず、音訳でも省かない。

וְרָשָׁה «その(f.sg.)地」(申 29:22) ʔa.r.ʂo.h / ʔarʂoh / ʔrʂh

c.f. וְרָשָׁה «その地へ⁷¹」 ʔá.r.ʂo.^h / ʔárʂo / ʔrʂh

4.4.5 語源的正書法

たとえば、רֹאשׁ «頭」のアレフは先史ヘブライ語における *rāʕš の名残である。このアレフは実際には発音されていないので、転写の際には matres lectionis と同様に、翻字では ro.^ʔ.š のように肩上げし、音訳ではア

⁶⁹Matres lectionis は、もともと音変化の結果発音されなくなった文字が歴史的スペリングとして固定されたことから生じたと考えられる。c.f. Blau (1976:§2.4.)

⁷⁰文字論的に見れば、語末のへーとヨッドは語の視覚的な弁別に役立っている。

⁷¹この場合はアクセントの位置も異なることに注意。転写におけるアクセント表示については後述する。

レフを省略して roš と書く⁷²。

さて、ワウとヨッドは直前の母音との組み合わせによって読んだり読まなかつたりするので注意を要する文字である。すなわち、**וּ**、**וֹ**、**וְ**、**וּ**、**וֹ** においては、ワウとヨッドは直前の母音と融合して自分自身の音価を失っている⁷³。したがって、音訳でこれらのワウとヨッドを転写する必要はなく、翻字では肩上げて ?u^w、?o^w、?i.^y、?e.^y、?ε.^y と書く⁷⁴。それに対し、**וּ** (?i.w)、**וֹ** (?e.w)、**וְ** (?a.w)、**וּ** (?o.w)、**וֹ** (?a.y)、**וְ** (?o.y)、**וּ** (?o.y)、**וּ** (?u^w.y)、(括弧内は翻字) という組み合わせでは、ワウとヨッドはおそらく子音として読まれていた⁷⁵。例外として、複数名詞に付く三人称男性単数語尾 **וּ** のヨッドは発音されないために o.^y.w と翻字する⁷⁶。

| | |
|-------------------|---|
| וּבְחַרְוּ | 「彼らは選ぶ」(イザ 56:4) |
| | u ^w .b̄ð.h ^a .r.u ^w / ub̄ðh ^a ru / wbhru |
| דִּין | 「裁く」 di. ^y .n / din / dyn |
| הִקְמוֹתִי | 「私は立たせた」 h ^a .k̄i. ^y .m.o ^w .t̄i. ^y / h ^a k̄imoti / hk̄ymwti |
| רֹשִׁים | 「頭(pl.)」 r̄o. [?] .š̄i. ^y .m / r̄ošim / r̄?š̄im |
| חַטָּא | 「罪」 he.t. [?] / het / ht [?] |
| כֹּה | 「そのように」 ko. ^h / ko / kh |

⁷²アレフを肩に上げず、したがって音訳でもアレフを書くという転写の可能性もある。その場合の音訳は形態音韻論的である。

⁷³これらの多くは、通時の変化である二重母音の融合の結果、歴史的なスペリングだけが保存されたものと考えられる。**uw > û*、**iy > î* という変化は無条件に生じたものであろう。また、**ay > ê* **aw > ô* という変化は共にアクセントのない開音節で生じている。さらに ê の後に *ç* が後続するときには *ê > ë* と同化を起こしている。

⁷⁴なお、ヨッドの場合は母音記号(ヒリク、セゴル、ツェレ)が直前の子音文字に付いているのに対し、ワウには直接母音記号(シュルクの中点及びホレム)が付いているということ、すなわち両者の字節構造が異なるものであることに注意。もっとも、後述するように、ホレムの字節境界は曖昧である(4.6.3)。

⁷⁵歴史的に見ると、アクセントのある閉音節、語源的な長母音の間、語中で二重子音を形成する場合などでワウとヨッドは保存される傾向にあった。Joüon-Muraoka (1996:§7 d)、Blau (1976:§7.3) を参照。

⁷⁶スペリング及び周辺諸言語との比較から、おそらく **-ayhu* という語尾であったと考えられるが、そこから *-aw* への発展経路については不明な点が多い。詳細な議論については Joüon-Muraoka (1996:§94 d n.2)、Blau (1976:§7.3) などを参照。

4.4.6 先読みのパタハ

提案 14 「先読みのパタハ」は肩上げて示す。

語が喉音で終わる場合、喉音の前にわたり母音 a を挿入することで発音しやすくするという現象が聖書ヘブライ語に見られる。これは純粹に音声学的な現象であり、音韻論的に意味のあるものではない。そこで、翻字では a を肩上げて表記する。先読みのパタハの出現は予測可能ではあるが、音訳においても読みやすさを考慮して省略せずにおく。なお、このように肩上げすると複合シェワと紛らわしいかもしれないが、実際には出現位置や字節構造によってきちんと区別できるため、混乱するおそれはない。

רוּחַ 「息、靈」 ru.^{w.}ah / ru^ah / rwh

רָקִיעַ 「空」 rō.ki.^{y.}af / rōki^aaf / rkyaf

4.4.7 ケレーとケティヴ

提案 15 ケティヴは子音転写のみ行い、ケレーは括弧に入れる。

マソラ学者にとって、子音テキストのある箇所が文法的・内容的におかしいと感じた場合などには、子音テキストそのものには変更を加えることなく変更内容の母音記号のみを付し、欄外に変更内容の子音を書いた。もともと書かれていた子音部分をケティヴ (i.e. 「書かれたもの」) と言い、変更されたものをケレー (i.e. 「読まれたもの」) と呼ぶ。ケティヴとケレーは互いに別の語である。

ケティヴにはもともと母音が記されていないため翻字も音訳も不可能であり、子音転写を行うしかない。ケレーは翻字・音訳が可能であるが、それがケレーであることを明示するために括弧に入れる。

[ケティヴ] מְלוֹשְׁנִי、[ケレー] מְלוֹשְׁנִי

「悪口を言う者」(詩 101:5)

mlwšny (m.lo.š.ni.^{y.}) / mlwšny (mlōšni) / mlwšny

4.5 抑揚記号の転写

母音記号と抑揚記号はもともと聖書朗読用のものであるため、聖書テキストには一つ一つの語に精緻な抑揚記号が置かれている。それらをすべて転写するのは現実的ではないので、必要と思われるもののみを転写しておきたい。

4.5.1 アクセントの表示

提案 16 最終音節以外の場所にアクセントがある場合は *accent aigu* (´) で明示する。

聖書時代のヘブライ語のアクセントがどのようなものであったかは、歴史言語学的方法を用いて再建するしかない。しかし、マソラ時代のアクセントに関しては、聖書テキストに書かれた抑揚記号によってわかる。抑揚記号の本来の機能は朗読の抑揚を示すことであるが、アクセントのある字節の上下に置かれるため、副次的に語アクセントの位置を示している。原則として聖書テキストの語アクセントは最終音節に置かれるが、そうでない場合は転写の際にアクセント位置を示しておく。

לָקַחְתָּ «彼女は取った」 ló.ká.ha.t / lókáhat / lkht

4.5.2 マケフ

提案 17 マケフ (ֿ) はハイフン (-) で示す。

聖書ヘブライ語では、隣り合う語と語が連結して1つのアクセント単位として振る舞うことが多い。マソラ学者はマケフと呼ばれる記号を用いてこれを示した。筑波方式の翻字、音訳ではマケフをハイフンで転写する。なお、マケフは子音本文には存在しないため、子音転写では転写しない。以下に創 41:12 の例を挙げる。

| | |
|------|---|
| [原文] | וַיִּסְפְּרוּ לֹוּ וַיַּפְתְּרוּ לֹוּ אֶת־חַלְמֹתֵינוּ |
| [翻字] | wa.nn.sa.ppe.r-l.o ^w wa.yi.p.t.r-ló.n.u ^w ?e.t- h ^a .lo.mo.té. ^y .n.u ^w |

- [音訳] wansapper-lo wayyiptər-lónu ʔɛt-h^alomoténu
 [子音転写] wnspr lw wypr lnw ʔt hlmtynw
 [日本語訳] 私が彼に説明すると、彼は我々の夢を我々に解き明
 かした。

4.5.3 メテグ

提案 18 メテグは (N) accent grave (˘) で示す。

メテグは母音記号の隣に付けられる縦棒で、その母音をゆっくり正確に発音するよう注意を促すものであったようだが、第二アクセントを示す機能もある⁷⁷。したがって、メテグを accent grave で転写しておく。

- הַבְּנִיּוֹתֵינוּ 「彼女は賢かった」 hò.k.mo.^h / hòkmo / hkmh
 יִירָאוּ «彼らは恐れる» yì.^y.r.ʔ.u^w / yirʔu / yyrʔw

4.5.4 休止形と分離記号

主要な分離アクセントに関しては、転写の際にコンマで区切りを入れておくと読みやすくなる。それだけでなく、語の休止形を判別しやすいという利点も生まれる。休止形とは、聖書テキストの節の終わりなど、主要な区切りの直前で現れる特別な語形である⁷⁸。以下に休止形の例を挙げる。

- אֶרֶץ «地 (休止形)» ʔó.rɛ.ʃ / ʔóreʃ / ʔrʃ
 c.f. אֶרֶץ «地» ʔé.rɛ.ʃ / ʔéreʃ / ʔrʃ

さて、筑波方式では、分離記号のうち特に以下のものを転写しておきたい。

提案 19 分離記号のうち、アトナハ (N)、セゴルタ (N)、ザケフ (N)、レビア (N) による区切りをコンマ (,) で示す⁷⁹。

提案 20 文末のソフ・パスク (:) の転写にはコロン (:) を用いる。

⁷⁷Blau (1976:§4.4), Joüon-Muraoka (1996:§14) を参照。

⁷⁸休止形は歴史的に古い語形やアクセントパターンを示すことが多い。

分離記号の転写の実例は第5節で示す。

4.6 字節に関する補足と注意

さて、ここまで筑波方式の具体的な転写方法を説明してきたが、最後に実際の使用にあたっての若干の注意点を述べておく。

4.6.1 強ダゲシュとシュワ

筑波方式ではシュワを一貫して「ゼロ母音」としているため、時として強ダゲシュによる子音の重なりなのか、それとも子音連続なのかははっきりと区別できないことがある。そのような場合には翻字システムに導入した字節境界記号が大いに役立つ。

ここで仮に、翻字で音節境界記号を導入しない場合のことを考えてみる。

| | 翻字 | 音訳 | |
|---|-----------|----------------------|--------------------------|
| A | רִבְבוֹת | ribbo ^w t | ribbot 「数万」(申 33:17 など) |
| B | עֲנִיִּים | ʕonni ^y m | ʕonnim 「占い師達」(イザ 2:6 など) |

ヘブライ文字表記から翻字・音訳を行う方法についてはこれまで述べてきたとおりである。ここでは逆に、翻字・音訳からヘブライ文字表記を復元することについて考えてみたい。

まず A に関しては「ヘブライ文字表記において、摩擦音が強ダゲシュをもつことはない」ということから、**bb**の重なりが強ダゲシュによるものではないことがわかる。ヘブライ文字表記上、子音連続の最初の子音にはシュワが付けられる。したがって A はヘブライ文字表記への復元が可能である。次に B の場合、翻字からヘブライ文字表記を復元すると、2つの可能性が考えられる。1つはシュワを含む עֲנִיִּים であり、もう1つは強ダゲシュを含む עֲנִיִּים である。致命的な問題は「ヘブライ語表記と翻字との間の一意な対応関係」が成り立っていないということである。1つのテキストを翻字にし、その翻字からテキストを復元したときに2種類のテ

⁷⁹ただし、ヨブ記、詩篇、箴言の3つは他のテキストとは異なるアクセント表記が用いられる。そこで、これらのテキストに関しては、オレー・ヴェヨレド (e.g. רִבְבוֹת) 、アトナハ、レヴィアでコンマを打つことにする。

キストが得られるようでは翻字の意味をなさない。この曖昧さを回避する方法は、たとえば、シュワをアポストロフィなどの記号で転写する (e.g. *ʔon'niʔm*) といった方法が考えられるだろう。ところが、この例を見てわかるように、この曖昧さのそもそもの原因はラテン文字転写における *nn* という二つの字節が、ヘブライ語表記では一つ (נן) または二つ (נןנ) の字節に対応しようということにある。要するに、ヘブライ文字表記体系とラテン文字転写体系の字節構造の違いが、翻字からテキストへの復元を阻む障壁なのである。

ならば、ヘブライ語表記の字節構造を翻字でも示す手立てを考えればよいだろう。実際、アッカド語テキストの翻字ではハイフンで音節文字の字節境界を示し、ピリオドで表語文字の字節境界を示すことが多い⁸⁰。上記の例を、字節境界記号 (ここではピリオド) を用いてもう一度転写してみよう。

| | 翻字 | 音訳 |
|---|------------|---------------------------------|
| A | רִבְבוֹתִי | ri.b.bo. ^w .t ribbot |
| B | עֲנִימִי | ʔo.n.ni. ^y .m ʔonnim |

翻字にはヘブライ語表記の字節構造が反映され、2字節からなる子音連続 (それゆえ、ヘブライ語表記の復元の際にシュワを付ける) ことがはっきりと示される。

一方で、音訳では依然として曖昧さが残っているが、音訳の目的はテキストの復元ではないので、それほど問題にはならないだろう。もし音訳が紛らわしい場合は、翻字を添えておくともよいかもかもしれない。

4.6.2 字節と *matres lectionis*

一つのヘブライ文字が *matres lectionis* と子音とを同時に表す場合がある。

חִזְקִיָּהוּ 「ヒゼキヤ (人名)⁸¹」
 hi.z.ki.^yyo.hu.^w / hizkiyohu / hzkyh

⁸⁰筆者らが試した結果、ヘブライ文字の字節境界を示すにはハイフンよりもピリオドを用いた方がすっきりして見やすいという結論に達した。

⁸¹cf. חִזְקִי (歴上 8:17) hi.z.ki.^y / hizki / hzky

もし字節記号がない翻字の場合、翻字からヘブライ文字表記を復元したとき הַזְקִיָּהוּ と הַזְקִיָּהוּ の2つの可能性が考えられる。だが、筑波方式では字節境界記号によって、ヨッドに強ダゲシュが打たれていることがわかり、正確な復元が可能である。

4.6.3 字節とテキスト

ただし、字節の境界にも曖昧な部分があることを最後に指摘しておく。 אֵי ?o.w.y 「ああ！」のホレムはワウに属しているが、 כֹּהֵן ko.he.n 「祭司」のホレムは直前の文字に属している。このように、母音記号がどの文字と字節を形成するかはテキストの書かれ方に大きく依存しており、その都度判断していくほかない。たとえば שֶׁלֶשׁ 「3」は出版物によってはホレムがシンの右点と重なって שֶׁלֶשׁ となってしまう、一つの点が二つの機能を有する状態になる。したがって、これを š.o.l(o).š と翻字するか、 šo.lo.(š) と翻字するかは各人の判断に委ねる。

もう一つ、珍しい字節を持つヘブライ文字表記を挙げよう。 יְרוּשָׁלַיִם 「エルサレム」の最後のヒリクがメムとともに形成する字素は mi ではなく im である。したがって、 $\text{y.r.u}^w.\text{šo.la.im}$ / yrušolaim / yršlm と転写される。

5 筑波方式による転写例

以下に筑波方式による転写の実例を示す。それぞれヘブライ語テキスト、転写、音訳、子音転写、および日本語訳の順に挙げた⁸²。

5.1 転写例 1

申 32:6 より。

$\text{הַלִּיְהוּהַ תִּנְמַלְוֶהָ אֵת עִם נֶבֶל וְלֹא חָכַם הִלּוּא־הוּא$
 $\text{אֲבִיךָ קִנְיֶךָ}^{83}$ $\text{הוּא עֶשְׂךָ וַיְכַנְנֶךָ: זְכֹר יְמֹת עוֹלָם בֵּינוֹ$
 $\text{שָׁנוֹת הוֹרֶנְךָ שְׂאֵל אֲבִיךָ וַיַּגְדֶּךָ זְקִינֶךָ וַיֹּאמְרוּ לְךָ:$

⁸² 日本語訳には日本聖書協会による新共同訳を用いた。

⁸³ このダゲシュは “conjunctive dagesh” の一種で、言語的機能はないが、音声上の子音重複によって前後の語を続け読みさせる効果がある。翻字では肩に上げて重複を示すが、音訳では省く（ただし、子音重複ではないと言う学者もいる。Blau (1976:§4.2) を参照）。

h^a-lyhwh (la.[?]a.do.no.y)⁸⁴ ti.ġ.m.l.u^w-zo.[?]t, ʕa.m no.bɔ.l w.lo.[?]
 hɔ.kɔ.m, h^a.l.o^w.[?]-h.u^w.[?] ʔɔ.bí.y.kɔ k̄k̄ɔ.né.kɔ, h.u^w.[?] ʕò.ś.kɔ
 wà.y.ko.n.né.kɔ: z.ko.r y.m.o^w.t ʕ.o^w.lɔ.m, bí.y.n.u^w š.n.o^w.t
 d.o^w.r-wɔ.d.o^w.r š.ʕa.l ʔɔ.bí.y.kɔ w.ya.ggé.d.kɔ z.ķe.né.y.kɔ
 w.yo.[?].m.r.u^w lɔ.k :

h^a-lyhwh (la[?]a donoy) tiġmlu-zot, ʕam nobol wlo hokom, h^alo-hu
 ʔɔbikɔ k̄onékɔ, hu ʕòśkɔ wàykonnékɔ: zkor ymot ʕolom, binu
 šnot dor-wɔdor šʕal ʔɔbikɔ wyaggédkɔ zkenékɔ wyomru lɔk :

h lyhwh tgmlw zʔt ʕm nbl wlʔ hkm hlwʔ hwʔ ʔbyk k̄nk
 hwʔ ʕŠk wyknnk zkr ymwt ʕwlm bynw Šnwt dwr wdwr Šʔl
 ʔbyk wygdk z̄knyk wyʔmrw lk

愚かで知恵のない民よ／これが主に向かって報いることか。彼は造り
 主なる父／あなたを造り、堅く立てられた方。遠い昔の日々を思い起
 こし／代々の年を顧みよ。あなたの父に問えば、告げてくれるだろう。
 長老に尋ねれば、話してくれるだろう。

5.2 転写例 2

イザ 39:2 より。

וַיִּשְׁמַח עֲלֵיהֶם חֻקֵיהֶוּ וַיִּרְאֵם אֶת־בַּיִת נֹכַחַת (נִלְתָּו)
 אֶת־הַפֶּסֶךְ וְאֶת־הַזָּהָב וְאֶת־הַבְּשָׂמִים וְאֵת הַשֶּׁמֶן הַטּוֹב
 וְאֵת כָּל־בַּיִת פְּלִיו וְאֵת כָּל־אֲשֶׁר נִמְצָא בְּאֲזָרוֹתָיו
 לֹא־הָיָה דָבָר אֲשֶׁר לֹא־הָרְאִם חֻקֵיהֶוּ בְּבֵיתוֹ
 וּבְכָל־מִמְשַׁלְתּוֹ:

⁸⁴マソラ学者は「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。」(出 20:7)の律法を遵守し、神名 yhwh に対して ʔ^adonoy」(わが主)の母音記号を付けた。したがって欄外にケレーの子音表記が無くても、この語はケレーとして読まねばならない。このように常にケレーとして読まれる箇所が聖書テキストの中にいくつかあり、永遠のケレーと呼ばれている。転写の際、永遠のケレーはケティブに併記してもよいし、また省略してもよいことにする。

wa.yyi.s.ma.h ʔ^a.le.^y.he.m hi.z.ki.^yyo.h.u^w, wa.yya.r.ʔe.m ʔe.t-
 be.^y.t nkth(n.ko.t.o^w) ʔe.t-ha.kke.se.p̄ w.ʔe.t-ha.zzo.ho.b̄ w.ʔe.t-
 ha.bb.šo.mi.^y.m w.ʔe.t ha.ššé.mε.n ha.t̄.t.o^w.b̄ w.ʔe.t ko.l-
 be.^y.t ke.lo.^y.w, w.ʔe.t ko.l-ʔ^a.še.r ni.m.šo.^ʔ b.ʔò.s.ro.tò.^y.w,
 lò.^ʔ-ho.yo.^h do.bo.r, ʔ^a.še.r l.ò.^ʔ-he.r.ʔo.m hi.z.ki.^yyo.h.u^w
 b.be.^y.t.o^w u^w.b.ko.l-mε.m.ša.l.t.o^w :

wayyismaḥ ʔ^alehēm hizkiyochu, wayyarʔem ʔe.t-be.t nkth(nkoto) ʔe.t-
 hakkeseḫ wʔe.t-hazzohob̄ wʔe.t-habbšomim wʔe.t haššémēn hattob̄
 wʔe.t kol-be.t kelow, wʔe.t kol-ʔ^ašer nimšo bʔòšrotow, lò-hoyo
 doḫor, ʔ^ašer lò-herʔom hizkiyochu bbeto ubkol-memšalto :

wyšmḥ ʔlyhm ḥzkyhw wyrʔm ʔt byt nkth ʔt hksp wʔt hzhb
 wʔt hbšmym wʔt hšmn ḥtwb wʔt kl byt klyw wʔt kl ʔšr
 nmsʔ bʔšrtw lʔ ḥyh dbr ʔšr lʔ hrʔm ḥzkyhw bbytw wbkł
 mmšltw

ヒゼキヤは使者たちを歓迎し、銀、金、香料、上等の油など宝物庫と、
 武器庫、倉庫にある一切の物を彼らに見せた。ヒゼキヤが彼らに見せ
 なかったものは、宮中はもとより国中にひとつもなかった。

5.3 転写例 3

エゼ 9:11-10:1 より。

וְהָיָה הָאִישׁ לְבָשׁ הַבְּדִים אֲשֶׁר תִּקְצֹט בְּמַתְּנוֹ מִשִּׁיב
 דָּבָר לְאָמֹר עֲשִׂיתִי כְאֲשֶׁר (כָּל אֲשֶׁר) צִוִּיתָנִי:
 וְאַרְאֶה וְהָיָה אֶל-הַרְקִיעַ אֲשֶׁר עַל-רֹאשׁ הַפְּרָכִים
 כְּאֲבֵן סַפִּיר כְּמַרְאֵה דָמוֹת כְּסֵא נִרְאָה עֲלֵיהֶם:

w.hi.nne.^h ho.ʔi.^y.š l.bu.š ha.bba.ddi.^y.m, ʔ^a.še.r ha.kkÉ.se.t̄
 b.mo.t.no.^y.w, me.ši.^y.b̄ do.bo.r le.^ʔ.mo.r, ʔo.sí.^y.t̄i.^y kʔšr
 (k.ko.l ʔ^a.še.r) ši.wwi.^y.t̄o.ni.^y :

wɔ.ʔɛ.r.ʔɛ.^h, w.hi.nne.^h ʔɛ.l-hɔ.rɔ.ki.^{y.a}ʔ ʔ^a.šɛ.r ʔa.l-ro.ʔ.š
 ha.kk.ru.bi.^y.m, k.ʔé.bɛ.n sa.ppi.^y.r, k.ma.r.ʔe.^h d.m.u.w.t
 ki.sse.^ʔ, ni.r.ʔɔ.^h ʔ^a.le.^y.hɛ.m :

whinne hoʔiš lbuš habbaddim, ʔ^ašer haḳḳéseṯ bmoṯnoʷ, mešib
 doḅor le^ʔmor, ʔośiṯi kʔšr (kḳol ʔ^ašer) šiwwiṯoni :
 wɔʔerʔɛ, whinne ʔɛl-horoḳi^aʔ ʔ^ašer ʔal-roš hakkrubim, kʔéḅen
 sappir, kmarʔe dmuṯ kisse, nirʔoh ʔ^alehem :

whnh hʔyš lbš hbɔym ʔšr hḳst bmtnyw mšyb dbr lʔmr ʔšyṯy
 kʔšr šwyṯny wʔrʔh whnh ʔl hrḳyʔ ʔšr ʔl rʔš hkrbym kʔbn
 spyr kmrʔh dmwt ksʔ nrʔh ʔlyhm

そのとき、亜麻布をまとい腰に筆入れを着けている者が報告して言った。「わたしは、あなたが命じられたとおりにいたしました。」わたしが見ていると、ケルビムの頭上の大空の上に、サファイアの石のようで、形は王座のように見えるものがあるではないか。それはケルビムの上に見えた。

6 おわりに

本稿では、聖書ヘブライ語のラテン文字表記をめぐる諸問題を文字学ならびに文字論の観点から論じ、既存の多様な転写方式を概観したうえで、3人の筆者が現時点で最良と考える方式を提案した。今後は筑波大学の一般言語学教室を中心にこの方式を運用しつつ、賛同者を増やしてゆきたいと思う。しかし、もとより本稿はこの方式による統一を意図するものではない。Weinberg も指摘するとおり⁸⁵、どういう目的で転写をおこなうかによって、転写方式のあり方も変わってくる。筑波方式は聖書ヘブライ語の言語データを一般言語学の分野で扱うために最良の方式である。それ以外の分野においては、異なる要請に基づく別の判断があつて当然である。ただし、3種類の転写からなる筑波方式は基本的にあらゆるニーズに対応

⁸⁵“The first step toward any unity at all is that a romanizer of Hebrew have a clear idea about the context of his work and that he choose the corresponding style of romanization.” (Weinberg (1970:2))

できる可能性をもつと筆者は考える。したがって、一般言語学以外の分野でこの方式を用いて聖書ヘブライ語を転写してもまったく問題はない。また、この方式は完成されたものではない。本稿読者からの批判、聖書ヘブライ語に対する理解の進展、運用上の問題等に対応しながら、よりよい転写方式の確立を目指してゆきたい⁸⁶。

【参考文献】

- Andersen, F. I. and A. D. Forbes (1986) *Spelling in the Hebrew Bible*, Rome: Biblical Institute Press.
- Blau, J. (1976) *A Grammar of Biblical Hebrew*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Blau, J. and S. E. Loewenstamm (1970) “Zur Frage der Scriptio plena im Ugaritischen und Verwandtes,” *Ugarit Forschungen* 2, 19-33.
- Coulmas, F. (1996) *The Blackwell Encyclopedia of Writing Systems*, Oxford: Blackwell Publishers.
- Freedman, D. N. (1992) “The Evolution of Hebrew Orthography,” in Freedman, D. N., A. D. Forbes, and F. I. Andersen (eds.), *Studies in Hebrew and Aramaic Orthography*, Winona Lake: Eisenbrauns.
- 福盛貴弘・池田潤 (2002) 「文字の分類案：一般文字学の構築を目指して」『一般言語学論叢』4・5, 32-56.
- Hetzron, R. (ed.) (1997) “Genetic Subgrouping of the Semitic Languages,” in Hetzron, R. (ed.), *The Semitic Languages*, London/New York: Routledge, 3-15.
- Huehnergard, J. (2000) “Introduction to the Comparative Study of the Semitic Languages”, Course Outline of Semitic Philology 140, Harvard University, <http://www.courses.fas.harvard.edu/~sph1140/syllabus/outline.html>
- Ikeda, J. (2003) “Preface,” *Orient* 38, 1-4.

⁸⁶ 近く、本方式に関するウェブページ (<http://www.lingua.tsukuba.ac.jp/ippan/Semitic/tensha/>) を立ち上げ、使用者からのフィードバックを反映させた改定を随時加えていく予定である。将来的には、このページを通してヘブライ文字データと翻字の相互変換ツール、翻字から音訳や子音表記を生成するツール等を提供していく計画もある。

- Jouion, P. (1996) *A Grammar of Biblical Hebrew*, translated and revised by T. Muraoka, Second Reprint, Roma: Biblical Institute Press.
- Kautzsch, E. (1910) *Gesenius' Hebrew Grammar*, translated by A. E. Cowley, Oxford: Clarendon.
- Khan, G. (1997) "Tiberian Hebrew Phonology," in A. S. Kaye (ed.), *Phonologies of Asia and Africa*, Vol. 1, Winona Lake: Eisenbrauns, 85-102.
- Krahmalkov, C. R. (2001) *A Phoenician-Punic Grammar*, Leiden: E. J. Brill.
- Lambdin, T. O. (1971) *Introduction to Biblical Hebrew*, New York : Scribner.
- Meyer, R. (1992) *Hebräische Grammatik*, Berlin: Walter de Gruyter.
- 文部省(編)(1997)『学術用語集：言語学編』日本学術振興会
- Rendsburg, G. A. (1997) "Ancient Hebrew Phonology," in A. S. Kaye (ed.), *Phonologies of Asia and Africa*, Vol. 1, Winona Lake: Eisenbrauns, 65-83.
- 佐々木嗣也(1999)「ヘブライ語の口頭伝承について」『ユダヤ・イスラエル研究』17, 10-15.
- Steiner, R. C. (1977) *The Case for Fricative-Laterals in Proto-Semitic*, New Haven: American Oriental Society.
- Waltke, B. K. and M. O' Connor (1990) *An Introduction to Biblical Hebrew Syntax*, Winona Lake: Eisenbrauns.
- Weinberg, W. (1970) *Transliteration and Transcription of Hebrew*, Hebrew Union College Annual 40-41, 1-31.
- Yeivin, I. (1980) *Introduction to the Tiberian Masorah*, Atlanta: Scholar's Press.

Romanization of Biblical Hebrew

— A Methodological Discussion and Proposal for a New System —

Jun IKEDA, Yona TAKAHASHI and Akira IKEDA

The present paper discusses some basic methodological issues concerning romanization of Biblical Hebrew (BH below) from a linguistic and graphemic point of view (section 2, by J. Ikeda), surveys the existing systems of romanization (section 3, by A. Ikeda), and proposes a new system, which seems at present to be the best one for the purpose of presenting BH texts (consonants of the Biblical times and vowels according to the Tiberian pointing) for linguists in general (section 4, by Takahashi). We call it the Tsukuba system of BH romanization.

The Tsukuba system consists of three levels of romanization: transliteration, transcription, and consonantal romanization. Transliteration reproduces all the graphic elements (but most cantillation marks) in the Hebrew script as well as graphic boundaries so as to enable full recovering of the Hebrew spelling from the transliteration. Non-phonemic elements such as *matres lectionis* and compound-schwa are superscribed in our transliteration. Transcription conveys the phonemic shape of the BH texts with a few non-phonemic phonetic elements (e.g. compound-schwa, the furtive *a*) in superscript in order to facilitate subtle articulation of the Biblical text. Consonantal romanization is indispensable for the romanization of unpointed words (e.g. *ketiv*) and manuscripts (e.g. the Dead Sea Scrolls). It can also be used for simplified representation of the pointed text.

The Tsukuba system relies on IPA to a great extent (e.g. *ʔ*, *ħ*, *ʕ* instead of traditional *ʔ*, *h*, *ʕ*, and vowels), but has adopted a few traditional diacritics which express BH phonemic and/or graphic system better than IPA (e.g. *ḥ*, *ḡ*, *d̄*, *k̄*, *p̄*, *t̄*). Traditional diacritics are used also for some phonemes whose phonetic value remains uncertain (e.g. emphatics and *š̄*).

The Tsukuba system can be illustrated by the following example:

Transliteration *wa.yyi.ś.ma.ħ* *ʕ^a.le.^y.hε.m* *ħi.z.ḳi.^yʔɔ.h.u^w*,

wa.yya.r.ʔe.m ʔe.t-be.y.t nkth (n.ko.to.^w) ʔe.t-ha.kkε.se.p̄ w.ʔe.t-
 ha.zzo.ho.b w.ʔe.t-ha.bb.śo.mi.y.m w.ʔe.t ha.ššé.me.n ha.t̄t.o^w.b
 w.ʔe.t ko.l-be.y.t ke.lo.y.w, w.ʔe.t ko.l-ʔ^a.še.r ni.m.šo.^ʔ
 b.ʔò.s.ro.t̄o.y.w, l̄ò.^ʔ-h̄o.yo.^h d̄o.b̄o.r, ʔ^a.še.r l̄ò.^ʔ-h̄e.r.ʔo.m
 hi.z.ki.yó.h.u^w b.be.y.t.o^w u^w.b.ko.l-mε.m.ša.l.t.o^w :

Transcription wayyiśmah ʔ^alehεm hizkiyóhu, wayyarʔem ʔe.t-be.t nkth
 (nkoto) ʔe.t-hakkese.p̄ wʔe.t-hazzohob wʔe.t-habbśomim wʔe.t
 haššémen ha.t̄tob wʔe.t ko.l-be.t kelow, wʔe.t ko.l-ʔ^ašer nimšo
 bʔòšrotow, l̄ò-h̄oyo d̄obor, ʔ^ašer l̄ò-h̄erʔom hizkiyóhu bbeto ubk̄o-
 memšalto :

Consonantal romanization wyšmh ʔlyhm hizkyhw wyrʔm ʔt byt nkth
 ʔt hksp wʔt hzhb wʔt hbšmym wʔt hšmn htwb wʔt kl byt
 klyw wʔt kl ʔšr nmsʔ bʔšrtyw lʔ hyh dbr ʔšr lʔ hrʔm
 hizkyhw bbytw wbkl mmšltw

(Is 39:2)

junikeda@lingua.tsukuba.ac.jp
 s025035@ipe.tsukuba.ac.jp
 aikedas5@yahoo.co.jp